アラン
海辺の対話
（下）

高村　昌憲　訳

アラン『海辺の対話』（下）　高村昌憲訳

第五の対話

第六の対話

第七の対話

第八の対話

第九の対話

訳者あとがき

《反映》　鋭く尖った岩の混沌と、裂けて砕けた海、多数の反映、渦巻、数々の泡の輪、瞬間瞬間に永遠の様に見える金色に変わる雲。ここには自己によるものは何もありません。岩のギザギザも外部の活動によると言えないこともありません。浜辺には岩の形状を持つものは少しもありません。その形状は水によるものです。海が旅行者の様な月に驚いています。既に新しい月が始まっています。三日月が、過ぎ去った日々である様な雲の背後で大きくなりました。再び月は半月になって蒼白くなり、空に傾いている太陽に続きます。画家は、水に出来る円を幾つか描きました。

ルブランは言いました、「人類は絶えず死と誕生に直面して来ました。何時でも同じ月と、その運動による位相を考えることは些細なことではありません。　《欠けた月》　古代の人々は欠けた月を嘆き、大きくなったもう一つの月を喜びました。メカニズムは真実ではないと、ここで言うことは出来ません」

私は彼に答えました、「私には分かりません。ところで、それが多分最も好意的な場合には、外観がもっと苦労してそれに折れ合う時に間違いを言いたくなるから、余りに容易に真実が判断されます。私としては、月は決して死なないし、死ぬことも出来ないと私自身に繰返し言いたいのです。一つの軌道上にこれらの月の全体を全て思考すのが、少なくとも私たちの精神です。結局のところ或る位置から隣接した位置への関係は、月がここにあって最早あちらにない時であるのですから、月の事実を存在出来なくします。《軌道》　私たちの渦巻と擦れる何らかの渦巻を考える方が私は好きです。月はその中心です。そして更に渦巻とは思想です。最早、月の軌道もありませんし、この水の中には円もありません。軌道が変化を読むための一つの方法である様に、これらの円も変化を読むための一つの方法です」

画家が私たちに関心を示しました。彼は言いました、「昼は始まり、そして終わる。夜も始まり、そして終わると昔は考えられていた。昼も夜も決して停止せず、地球は一方から他方へ絶えず滑る様に進んでいるのを我々は知っている」

ルブランは言いました、「常に一つの運動によると考えられている変化です。しかし、地球が回っていることは、固定された数々の点の選択を前提としていて、その運動は一つの関係でしかないが、地球だけでは成り立たないのです」

画家は言いました、「太陽は私を無視している。絵画芸術は毎日少しずつ描くことである。でも、激怒や有頂天はそこでは全く反対のものである。　《疑うこと》　ご覧なさい。この筆触（タッチ）は瞬間ものではない」画家はパレットの表面を削っている間、再び言いました、「運動が諸事物の中にあると仮定するのは、極めて自然な誤りである。しかし、それは重大な結果による誤りである。何故ならその時、我々は秩序と原因と法則も同様に諸事物の中にあると考えるからだ。その様にしてもう一つの魂が合体し、悟性の顔をするのが神である。我々にはここに困難な点がある。というのも、原因と法則にも同様に形式があり、結局のところそれらは自然が少しも服従させられない悟性の必然性であるからだ」

ルブランが答えて言いました、「そこであなたが言っていることは私には理解出来ません。少なくとも私は何時もそのことを感じていました。帰納主義は、何時も私には学校が卑劣に思われましたし、アカデミーも単純に嘘であると思われました。同じことを繰返すものは何もありません。数々の法則も凡そのものです。そこから全てを疑うことが導かれます。勿論、この道も又正しいものではありません。私はそのことを感じ始めています」

《立法者たち》　私は言いました、「人々に対して奨励すること、そして自分に対して疑うことはアカデミー的なものです。マルチニック島の噴火が島の最後になると予告したアカデミーの人は、自分自身に自

信を持てるでしょうか」

老人は言いました、「政治的な数々の法律がいわば望まれていること、人々が前例に倣って水と火を管理するのをもっと考えることを、人々は大変に強く納得させられているのである。沢山の習慣を困惑させる昼夜平分時の有名な潮において、テムズ川に幾つもの限界を設けた予言者たちがいたことを疑ってはならない。しかしながら、この大混乱が秩序に従ったものであったと理解されるのは、潮と風の法則そのものによっているからである。この矛盾を乗り越えなければならないのだ」

ルブランは尋ねました、「この見方によって私たちが法則に近づくしかないのは何でしょうか。しかし、それは順調なのでしょうか。私は話をしていても何も知りません」

《帰納》　老人は言いました、「我々に足りないのは勇気である。それは偶然の出来事によるのではない。帰納が間違っているのは、偶然の出来事によるからであると言おう。本質に従って勇気を判断しよう。そして本質とは、最初のものは間違いであるということであり、そのことを思い切って言おう」

私は言いました、「その通りです。間違っているのは、運動による法則という形式であり、力であり、抵抗力のある固体である。それを適用するなら、内容がどんなものであろうと、それは間違いです。そして、紐には最早直線が無いと繰返して言う場合には、畑の縁は直線でないということです」

老人は答えました、「あるいは寧ろ間違っていることは、内容の代わりに形式を理解することである。我々の運動が必然的に一つの法則になり、この法則が諸事物の法則となって結論付けられることである」

ルブランが尋ねました、「法則も無く一つの運動を理解することは出来ないのではないでしょうか」

《存在》　老人は答えました、「あなたはこの質問をしましたが、我々が今まで十分に説明して来たことによって既にあなたには答えが出ているのである。何故なら、直線とは維持されている法則でしかなく、風や潮に対しても言えることであるからだ。平行線も又、法則以外の何ものでもなく、繰返しが約束されていて、距離と時間を無視する同一性のものであるからだ。そして同じ様に、その運動は伸ばされたり描かれたりした法則になり、変化を判断するために本当に保証するものになる。運動の各部分が全体から飛び出たものであるとか、線の各点も線から飛び出た点であると我々は理解しなかっただろうか。その大胆さの中には帰納がある。運動の道程にはどんなものにも繰返ししかなく、先行したものによって絶対的に決定されたものの連続である。従って、この運動は決して事物ではないのだ。それは決して存在しないのである。存在とは、一つの運動とか、合成された二つとか三つとかの運動であることを拒絶するものである。結局のところ、それには外観がなく、偶然の出来事もなく、構成されたものであり物体ではない様なものである」

《関連》　私は言いました、「存在はそれ故に他の言葉で言うと敵であり、観念を拒絶する者になるのでしょうか」

老人は反論しました、「観念を拒絶する者であるが、寧ろ観念を完成させる者である。あゝ、友人たちよ。海は我々に未だ教えなかったが、我々は偶然にも陸と海の息子である」

それから私たちは顔付と仕草で問いかけた処、老人は続けて言いました、「あなた方は我々のメカニズムしか考えないし我々の幾何学も同様であるが、決してそれだけでは十分ではない。しかし、本質によって判断しなければならないであろう。連続した数は何と無限に続くことか。そこに一つの実際の状況はないのだ。数え上げる星々のことを考える前に、一つ目の数は次の数を呼び、二つ目の数も同様であるのは明白であった。以上が本質における外観である。悟性に固有の活動によって、変化は数それ自体や諸関係の中で移動した数から除外されている。　《不足》　数に適する変化とは、数の連続や二倍や三倍や累乗との関係であり、隣にある他の数を理解するための必然性でもある。数の間では同様に、他の数も必要である。そして、この多産性は驚くべきものだ。所謂自然は数々の相違を提供することに決して飽きないし、悟性も同様に思考することに決して飽きないのである。私は先ず数の事例を考えたが、それは外観に関して剥き出しの観念を我々に提供するために、あらゆるものの中で最も抽象的である。しかし、この数の連続は単に

端からと言う訳ではないが、十分ではないのであろうか。もしも一つの数からもう一つの数への直接の関係として目指すのでなかったなら、一つの数からもう一つの数へ飛躍しないに違いない。数は直線を要求する。そして今度は直線の番であるが、他の幾つもの点を読み、他の幾つもの直線を読むのである。直線は物体を探し、そして豊かで現存するもので急を要するものを見出すことであろう。この世界を見出すのだ」

私は言いました、「世界とは、悟性の形成には奇妙なものです」

老人は付け加えました、「しかし外観の観念そのものに従って奇妙なのだ。私は、それに気付いたデカルト以外は見ないのである」老人は微笑しながら少し沈黙した後で言いました、「私はその規則を適用して、先ずは終わりにする。それがもしも幾何学者でないとすると最初は否定しに来て、次にどんな内部の決定でも否定しに来る激しい純化によってどんな法則も打ち破る絶対的外観の法則を誰が理解するだろうか。《禁欲主義》　ここには禁欲主義の基本がある。ここにはピタゴラス主義の若者がいるのだ。その直線は痩せていて、直線そのものの外部へ長く伸びている。想像力は筋肉をなお一層混ぜたいけれども、その力は乏しくて何も出来ないが、その様にして一種の希望が生まれるのだ。身体をこの若者に与えるのは、私には禁じられていることなのだ。従ってピタゴラス以来一人ならず多くの人々が、常に待って想像力そのものを除いて約束する豊かさを発展させながら、孤独の裡で心に言ったのだ。　《存在理由》　痩せた悟性よ、お前は何を私に望むのか。悟性は決して答えないで世界を示すのである。そして答えるのは世界である」

老人は黙りましたが、私は何処へ行くのかも分からず帆を一杯に張って漕ぎ出して尋ねました、「世界は何を答えるのでしょうか」

老人は答えました、「それでは一種の謎掛けをしよう。世界は言う、「私は全てであり、法則はその一部のものである。私の部分部分は各々が自分でしかない。しかし各々は又、他の各々でしかない。そのことは起こるものであり、生まれるものであり、死ぬものであり、全てが他の事物に依存している。そして、この存在理由は他人のものであって、他人は更に他人に依存しているので、理由ではないのだ。そして、事物があるが儘のものとして他の理由は決してなく、次のとおり他の事物もあるが儘であり、又あるが儘であったのだ。更に、もしも何時か或る存在理由が何処かで、事物そのものの何らかの理由や、ついには事物の中で思考する一種の神が現れたなら、その存在は直ぐに本質において消滅したことを良く理解して置いて頂きたい。その様に我々の賢者たちの一人が言った時、我々とは別の魚や鳥や波や岩や海藻で我々は生活するのであり、神々の死を生きるのである」殆どかくの如くして、世界は私に海の〈ヴィーナス〉を描くための技術を教えてくれたのだ。というのも、その技術は水の輪の中に、航跡でしかない航跡の中に、借り物でしかない借り物の反映の中に全てがあるからだ。それは他のものでもなく全く美しいものだ。従って痩せた悟性は、浜辺や岬が続いていて形成されて崩れる様に、我々を驚かすのを終わりにしなかったのである。私の友人たちよ、理由というものは決してないのである」

私は言いました、「理由はありません。恐らく国家理由以上に存在理由はありません。しかし、あなたは私たちを活発に燃える様にさせるでしょう」

《ピュロス》　老人は言葉を続けました、「悟性が奇妙な原因で消えるのは悟性の法則である。人が言う処によるとピュロス（1）は頭上のおまるで死んだのだ。これは戦術に関する技術であると理解出来る関係は無い。しかし、そのこと自体が戦術に関する技術であるのを明らかにしているのである」

ルブランは言いました、「アルキメデスの死は幾何学と力学を明らかにしている様です」

私は付け加えて言いました、「いずれにしても悟性のこの人物のことを言わなければなりません。それを望んだのは君です」

《ハマトビムシ》　ハマトビムシが跳び回っていました。その中の一匹が、未だ真新しいカンバスの上に乗っかり、描かれた空の僅かな一角がその頭部に奪い取られていました。着色されたその練り粉と油は、そこで何を作ったのでしょうか。何という奇妙な結果でしょう。亜麻の花が咲き、種子が砕かれ、粉にす

るための製粉所があります。化学者と酸化物があります。箱と絵筆と建具屋と樹木があります。画家と計画と鉄道があります。家と石工です。ハマトビムシの冒険旅行と潮の流れ等々を除いて、この小さな甲殻類が決して頭上に奇妙な青い帽子を被っていなかった様に、これらの無数の仕事には差異しか必要でありませんでした。私たちの一人が、その小さな虫を指で示しました。その他の者たちは目で追いました。それと同時に楽しい考えが続きました。というのも、その虫を見る術を知っている者にとっての単なる混乱は、もう一つの希望を誕生させるからです。そして代償によって単なる外観は、単なる内面を強めるものでもあります。しかし、これらの思想は未だ成熟していませんでした。悟性の道に戻らなければなりませんでした。常に戻らなければなりません。余りに長い沈黙の後で、私たちを対話に連れ戻したのは理工科学校生のルブランでした。

《時間》　彼は再び言いました、「私は原因と結果を理解しています。それらを私は力学から決して分離しません。簡潔に言うと、限定された運動の次の瞬間は、先行した直接的な瞬間に依存しています。しかし実体の無いこの原因は単なる関係であり、原因ではないのでしょうか。そして観念におけるこの連続が時間なのでしょうか」

私は付け加えて言いました、「そうです、時間とは世界のことです。時間は私たちを大変良く把握しています。この瞬間は唯一のものであり、決して戻りません。既に、もう存在していません。そして私たちの思想を停止しながら、全ての事物全体に続く瞬間への移行や、決して変動の無いこの運動にもっと敏感にならないとしたなら、私たちは何が出来るのでしょうか」

老人は言いました、「時間は理性にとっての暗礁であり遭難である。改めて救助のための悟性を呼び出そう」

《速さ》　今度は私が言う番でした、「悟性を呼び出しましょう。時間には決して速さが無く、何の大きさも無いのです。それは新しい物理学者たちの横柄さによって、注意深い精神を持つ全ての人々に現れるものです。何故なら、彼らの様な提案がこれからは明白になると言った時に、それが検証する機会になったのであり、その提案は少しも正しい認識力を持っていなかったことが見出される機会になったのです」

ルブランは言いました、「時間には決して速さがありません。空間と時間との二つの関係によって速度を仮定すること以外に、二つの時間が一方は速く、もう一方は遅くにはなり得ません。従ってこれらの二つの時間には、一つの共通した時間があるに違いありません。そしてこの共通した時間が、時間になるのです。他の数々のものは色々な運動になるのです」

《次元》　私は再び言いました、「時間には少しも次元がありません。場所との関係や、場所の変化や、距離を少しも前提にしていません。一つの事物は場所を変えることなく、連続した瞬間に、更に他の色々な事物と同じ歩みの連続した瞬間に必然的に移ります。そして、これらの時間の歩みは隠喩でしかありません。時間は遠くにも近くにもありません。オリオン星雲の時間は、私たちが座席を変えずに私たち自身で旅行するこの時間と同じです。時間が遠ざかると言うのは、その場所が遠ざかるのですから、偽りの隠喩になります。しかし私たちがこの場所に到達する時間は、それを望むか否か、この場所へ行くか否かが生じます。時間を早めることは出来ませんし、遅らせることも出来ません。従って時間を歩き回ることは出来ません」

《形式》　老人は言いました、「少しの言葉でもそこには大掃除がある。言葉では何でも言えるので、分離された空間については中味がなくても何でも言える様に、分離された時間についても中味がなくても何でも言えるのである。しかし、悟性が作品のために経験を把握する時、時間が形式であることが思い出されるのであり、他のことは考えられないのである。それで十分なのだ」

私は言いました、「それで十分なのは、時間が事物ではなく、同様に空間でもなく、空間と時間による以外に如何なる事物も中味になり得ないことを知るためでもあるからです」

老人は再び言いました、「よろしい。その通りである。精神と世界を一緒に発見すること、そして他方に

よって一つ一つを発見することは、その人を満足させるのだ。彼はもう尋ねない。求めることもない。しかし自分の場所と全ての義務さえも確信させるこの二重の抵抗に出会うことがなければ、或る時は理性に基づいて理性しか与えないものである理性によって世界の支配へ出発するのである。又、或る時は世界に基づく世界しか与えないものである一種の理性的な内容でもある世界によって理性の支配へ出発するのである。　《普遍的なもの》　そして、それは常に形式と内容を混同することとなるが、さもなければそれらを区別した後にも、それらを区別出来るのを理解しないのだ。諸観念で世界を知ること、それが悟性である」

私は言いました、「自意識のある各人に固有の秩序や、自らの思想と感情の秩序としての時間を持ち、その秩序が世界へ運んで奇妙な服として世界に服を着せる者たちを、私は無視するのでしょうか」

老人は答えました、「それは現在の我々の探究から外れている。しかし我々が一般的時間によってしか秩序の中の思い出を持たないことに気付くのは難しくないのである。その前と後は普遍的真理であっても、詩人も又やはり思い出すのである」

私は結論付けて言いました、「それ故に、そこには普遍的なものとして復元された時間があります。理解がどれ程僅かでも、この美しい言葉に感嘆して下さい。普遍的なものとは必然性です。それ故に宇宙のことであり、いわば私が宇宙を思考することでもあります」　《演繹》　老人は付け加えて言いました、「普遍的なものを発見することとは、それを自己に従わせるのが出来ないことであり、それに整理されることであり、それによって見分けられることであり、それは精神を自己と認めることである。それ以上行くことは、一般に言われている様に意志であり、どんな証明においても普遍が想定されるために、暗闇の向こうへ跳ぶことである」

私は言いました、「私の幼い考えをお許し下さい。時間を中断させるのは出来ないことから、宇宙は時間に従うこと、連続した瞬間はどんな時間も先行した時間を前提にしているのを唯一の理由とすることで、先行した瞬間に依存していると結論付けなければならないのでしょうか。同じ時間が一つの状態から他の状態に私たちを齎す唯一の理由によって、何らかの事物はどんな変化においても同一のものを残していると、結論付けなければならないのでしょうか。他の何らかの事物は、時間が常に時間に続くという唯一の理由によって常にやって来なければならないと、結論付けなければならないのでしょうか。　《壺の中》　結局のところ、時間の順序は逆に出来ないという唯一の理由で、後のものは前のものになれないのでしょうか。私にはそれは空疎に思えます。証明が齎した事実よりも力強くない証明です」

老人は答えました、「演繹は法律上間違っている。市民たちが服従する義務があることから、諸事物も服従する義務があることが望まれるに違いない。しかし、もしも私たちがこの対話を上手に導いたなら、事物が従うものは何も無いし、空間と時間と運動は私たちがそれ自体を把握するのを許す道具であることが多分見えて来るだろう」

ルブランは気付きました、「自然が大変に良く答える場合が幾つもあります。誰でも熱力学の第二法則(2)を知っています。そのことを私たちはくどくどと言われて来ました。閉じられた体系において、エネルギーは決してそれ自体では最早高められずに有効にならず、反対に所謂あらゆる仕事が行われて熱運動の転移には完全に可逆性がなく、常により一層低水準に降下することを少なくとも経験上の事実であるかどうかを言う術を誰もが知りました。そして恐らく時間殿だけが対象を与える、いわばこの不可逆的な変化を期待しなかったなら、世界の取扱いにおいてこれ以上に困難な状況を他に誰も見ませんでした。時間は戻ることが出来ません。そうして自然の変転も同様に戻ることが出来ないのでしょうか。それは奇跡的ではないでしょうか」

老人は答えました、「世界は正しい。その様に禁欲主義者たちは話していたし、それが忍従というものの源泉である。つまりどんなことも不可能であるとか、殆ど不可能であると私は信じて終わりにするのである。何故なら何人殺しても、要するにそれは神の世界の秩序であり、神の意志に抗い難く決定したと心で

言って、そして全てが善で、正しく、我々が力で行うことは全てが理性的であるからだが、秩序であろうがなかろうと殺すのを止めて信心深い賢者になるためであるからだ。　《狂人》　そして私の考えでは、端まで導かれたこの思想は狂人の魂でもある。賢明な悟性も偏狭な悟性も、何も望まないこの海の光景に倣って我々に勇気を忠告するが、そこでは我々を溺れさせる同じ海がアルキメデスの原理によって我々に良いものも齎すだろう。しかし、我々はここで踵を返す一点にいるのだ。それは神々を見詰めるための、遠い昔からの確かなやり方である」

《奇跡》　私は言いました、「私たちは奇跡を信用していません。それは最も一般的な世界のことです」

老人が再び言いました、「私はそれ故に秩序に従って考える。これは古代人の役目である。プラトンが我々に教えたかったのは、秩序によって考えるのは最も古い者で、単に答えるのは最も若い者であると我々に指摘する時である」「そうです。まさにその通りです。別な風に如何に言うのでしょうか。　《メカニズム》　私たちはピリオドとコンマを打つからですが、私たちが幾何学を慎重に理解することで全てが十分に空間があり、私は先ず一種の要約が許される様に思えるからです。第一にその様に私たちの経験に適用する原因が、時間に一致するのは本当です。しかし介在する諸概念が決して無い訳ではありません。それらは直線と角度であり、メカニズムであり、運動と力の構成であり、形式上の原子論であり、結局のところ内部にあるもの全ての否定です。それというのもメカニズムは、私が形式上と呼ぶ物体、つまり動き回る不変の事物を明らかにするからです。それは変わることのない仕事が変わるのと同じです。時間は私たちの力学的で幾何学的でさえもある構築の秩序に従って先行していると言いたい人々は、確かに余りに誇張し過ぎです。運動が未だ現実的なるものでなく、その変化に適用されているものでしかないのと同様に、力学による時間も同じく未だ時間ではありません。これは寧ろ時間という一つの存在です。あるいは時間と呼ばれるものであり、形式的に描かれていますけれども空虚で何も無い空間です。そして運動と同じで時間も、経験において知覚した事物を把握する時よりも完全に存在するものではありません。私たちの思想は時間の中では思想そのものであると、私たちは折り返して言いますけれども、私たちの思想によってそれ故に時間の方に一本の道があるのです。そしてこの考察は、いわば与えられた世界に注がれるために私たちの時間の観念がより一層近くにあるのに従って、思想の秩序を私たちに把握させるに多少なりとも適切なものです。しかし時間に従うためには決して急いではなりません。もしも私たちが、外部による以外には何も起きないことを良く理解していたなら、原因の二つの特性には最早殆ど謎に包まれないでしょう。　《神秘な原因》　要するに、ここでは既に神秘な原因を除去することだけが重要です。あるいはお望みなら、全く厳格にメカニズムを説明することだけが重要です。しかし今は、私たちの句読点とか呼吸が最良に示されるために良く調べる方が役に立つのです。最も若い人は、そこから答えることです」

ルブランは言いました、「私は沢山の答えを持っています。肯定は稀有な喜びです」

老人

《雨》　「雲は雨の原因であると言われないのだろうか」

最も若い人

「そう言われます」

老人

「しかし正しい言い方だろうか」

最も若い人

「私はどう答えて良いか分かりません。雲はそれ自体で雨にしかならないのを私は分かっているからです。水滴が降るのを止められません。見て下さい、あの高い処の空中に雨が降り出しましたが、この砂地までは決してやって来ません。もしも大地を濡らすものとしての雨を私が待っていても、雲は決して雨の原因になりません」

老人
「よろしい。しかし水滴が厚くなり寒風が吹いたりして、ついにはあらゆる状況によって、もしも雲が地面に触れる処に来たなら、雲は雨の原因になると我々は言うのではないだろうか」
最も若い人
「その時は雨であり、もう曇りではありません」
老人
「何と賢い若者だろう」
最も若い人
「えゝ、もう大人です」
老人
「年齢を甘受しなければなりません。でもねえ、雲は原因であると決して言えないのだろうか」
最も若い人
「原因です」
老人
《結果》　「そして、雨は結果だろうか」
最も若い人
「そうです」
老人
「原因がある限り、そして結果が少しも無い限り、その原因が原因になると言えるのだろうか」
最も若い人
「言えません」
老人
「それなのに結果がある時、既に結果の原因を分けられるのであろうか」
最も若い人
「決して分けられません」
老人
《変化》　「原因は結果に移ると、我々は言うだろうか」
最も若い人
「私たちはそう言うでしょう」
老人
「直ぐに結果に移るだろうか」
最も若い人
「私たちはそう言うでしょう。原因が原因になり、原因は結果以外の別ものでしかないと、直ぐに言うでしょう」
老人
「我々はそれ故にこれらの原因と結果という二つの言葉を分離させた儘には出来ないし、同様に或る点ともう一つの別の点、二つの点と直線、直線と角度、位置と運動を分離させることも出来ないのである」
最も若い人
「同様に、出来ません」
老人
《水滴》　「水滴は最初大変に小さいのだ」

最も若い人
「そうです」
老人
「そして、この小ささが大変にゆっくりと落下する原因になるのである」
最も若い人
「そうです」
老人
「しかし、水滴が最初は大変に小さく、そして次には直ぐにゆっくりと落下することを決して意味しないのだろうか」
最も若い人
「意味しません。水滴が大変に小さいこと、そのことだけで落下するのは大変にゆっくりなのです」
老人
《落下》　「しかし、もしも大気が冷たくなったなら、水滴は大きくなるのでしょうか」
最も若い人
「大きくなります」
老人
「そのことだけによってであろうか」
最も若い人
「そのことだけによってです」
老人
「それでは水滴がもっと大きくなる限り、もっと速く落下するのであろうか」
最も若い人
《原因》　「そのことだけによってです。原因は結果に移ります」
老人
「それ故に、原因が存在する瞬間と結果が存在し始める瞬間に、遅れは少しもなく隔たりも少しもないことはあり得ないのであろうか」
最も若い人
「そんなことは決してあり得ません」
老人
「従って、原因は決してありもしないが色々と考えられる大きさの様には少しも期待出来ずに、一時停止して止まることも出来ないのだろうか」
最も若い人
「もしも、少なくともそれが原因であるなら、それも出来ません」

私は言いました、「勝負は分からない儘にして置いて下さい。その原因は、スコラ的些末主義の理性の働きにおいて現れます。その原因は待っています。その原因は可能であっても決して行いません。それは法律上の人間です。そこでの誤りも又政治からやって来ます」

老人は反論しました、「それでも反対に、もしも悟性が加わったなら、新しい政治が見られるかも知れない。しかし先ずはもっと簡単な勉強に精を出さなければならないし、更に私の考えでは崇高な文学も自分のものにしなければならないのだ。どんな政治的抵抗も常に知性に対してあった。　《神学者たち》　知性は更に全ての武器と共に戦うことはなかったと私は思う。本当の処は政治家である神学者たちが自らの

集団に知性を位置づけることを望まれて、知性は何時も知性そのものを軽蔑するのであろうか」
　私は答えました、「今は、勝負の時です」
　　老人
「従って、原因と結果の果てしない連鎖において我々が、何も生まない原因と、決して原因のない結果を持ち続けたいと思うのは、まさに無駄であろうか」
　　最も若い人
「まさに無駄です」
　　老人
「しかし絶え間なく原因は結果に移るのだろうか」
　　最も若い人
「絶え間なく移ります」
　　老人
《凝結》　「雲は凝結して絶えず冷たい部分を大きくするだろうか」
　　最も若い人
「そうです」
　　老人
「もっと適切に言おう。冷たい部分は絶えず暖かいものから冷たいものへ移るのである」
　　最も若い人
「正直に言って仕舞いましょう」
　　老人
「雨は絶えず降るのだ」
　　最も若い人
「絶えず降ります」
　　老人
「しかし、暖かい部分において、又はもっと適切に言うと暖め直された部分において、雨は絶えず空中で乾かしているのである」
　　最も若い人
「雨は絶えず乾かしています」
　　老人
「そして、この意味において雲は下の方で区切られている」
最も若い人
「この意味においてはそうです」
　　老人
「従って雲は、止まっている時でさえも絶えず流れ込んでいるのである」
　　最も若い人
「雲は絶えず流れ込んでいます」
老人
《ヘラクレイトス》　「確かに万物が流転することを何世紀も前に言っていた人は、些細なことを言ったのではない。そして、ヘラクレイトスという太陽はプラトンの時代には諺にまでなったのである。その証拠にそのイオニア人は、安易な事物である流れ去る諸事物の逃走を少なくとも考えなかったのであり、その思想によって岩の核心そのものや、忠実に帰還して来る太陽にまでも入り込んでいたのである。私はそ

の思想によって良く言っていた。何故なら、我々は変化による以外に如何なる方法でも休息を思考することが出来ず、原因から結果までの関係は継続した移行によって生きるしかないからである」

最も若い人

「その通りです」

老人

《思想》　「かくして我々を常に次の瞬間に導きながら、時間も我々の抽象的な思想にはっきりと現れるだろうか」

最も若い人

「そうです、現れます」

老人

「しかし運動は、我々の精神という存在とは別のものを表現するのだろうか」

最も若い人

「表現しない様に思われます」

老人

「そして直線そのものは、直線には欠けているものとしての一種の流れによるのとは別のやり方で考えられるであろうか」

最も若い人

「直線は別な風に考えられません」

老人

「子供は大人に要求しないが、大人は子供に要求するだろうか」

最も若い人

「大人は子供に要求します」

老人

《織工》　「その様に我々は、織物を織る前に筬を試す織工に似ていないのであろうか」

最も若い人

「私たちは織工です」

老人

「そして、対象に対する我々の全ての観念は、服の様に交差した糸で織られていないのであろうか」

最も若い人

「全ての観念はそうなっています」

老人

《通路》　「メカニズムという形式が、休息よりもより良く我々に変化を把握するために準備すると言えるなんて、もう沢山だ」

最も若い人

「私たちはそう言えます」

老人

「我々は時間という唯一の必然性に必ず縋らなければならないのだろうか」

最も若い人

「私には分かりません」

老人

《期待》　「悟性の特性とは、一つの観念と次のもう一つの観念の必然性だけで満足するものである様に

見える。そして結局は直線が或る意味で時間を上手に描くことであり、運動が更にもっと上手に時間を描くことである。しかしながら、これらの足跡が時間を具体的に示すと言えないし、寧ろ時間を準備するだけである。何故なら時間は、次元としては否定されなければならないが、先ずは次元としての思想でもあるからだ」

最も若い人

「それは私も同じ様に思えます」

老人

「だからどんなメカニズムも期待に従って我々を規定し、何らかの事物への期待が起こるであろうが、それは絶えず起こるのであろうか」

最も若い人

「そういうことは絶えず起こります」

《継続》　私は再び遮りました。私は言いました、「私が信じていることですが、観念は薄くなります。確かに、私たちの弁証法は次の瞬間に弁証法そのものに陥ること、そして運動が思想の中で弁証法を続けることなく思想の中に停止することが出来ない様なものであることに気付くのは正しいことです。しかし私は、注意をここまで決して形作らなかった観念に関係がある方が好きです。それは原因の観念がその中に継続した変化を閉じ込めているものであり、急迫した落下であり、決して期待するものではありません。抽象的な武器が常に打撃を加えていて、外観を砕きます」

彼が答えました、「それ故に私はどんな忍耐も超えて、その点について強調したかったのです。その上、悟性は絶対的に必然性を基礎に置くのを機能と見做しません。悟性には沢山の方法で必然性を実感することで十分なのです」

《エントロピー》　私は、政治の絶えざる間違いが待つことであったり、もっと遅く行動するための原因が幾つもあると信じることであったりすることに納得させられますが、砲弾を込めた大砲が決められた時に発砲する様に、それが何時なのか分からないのです。その代わりに明白な観念によって知らなければならないことは、家は絶えず崩壊すること、山も絶えずすり減ること、爆発も絶えず行われること、そしてそれらに類似したことです。私は、現在の感情が現実と共に常に私たちと接触していて、目で見るよりももっと先見の明があるこの種の弁証法的期待を仮定していると思います。彼は付け加えて言いました、「しかし、影は長く伸びて夕空がもう赤いです。この対話は既に余りに長いので、私はもう一度検討したいと思いましたが、結論は言いません。極めて困難なことです」後のことは前のことに慣れないか否か、私たちは知っているのでしょうか。そして、如何にして私たちはそのことを知るのでしょうか。

ルブランは言いました、「エントロピー（３）です。何という神秘でしょう」

老人は答えました、「そうだ、要約されれば神秘である。しかし外部の関係から、この観念をもう一度鳴らせよう。それは恐らく剥き出しの存在としての観念である。閉じられた体系の中で全てがもっと下へ落下することに人が驚く時、諸規則の中のその規則が忘れられて、大きくても小さくても構わずに事物の変化が結局は事物においての新しいものであって、結果である。それは常に外部によって説明し、そして結局は事物が存在しないことによって説明しているのではないだろうか。　《一点》　もしも爆発物がそれ自体で集中したなら、そして火事の様に外部の爆発によるのでないなら、メカニズムはそこでは失敗し、一点による数々の内部の変化から生じていると言わざるを得ないのである。何故なら、この一点は我々が十分に言って来たことであるが、些細なものではないからだ。位置とか隣人からの衝撃の様に、それは外部にしか持たない性質である。そして主権を有するこの悟性の観念は、閉じられた体系が動かないことを要求している様に私には思えるし、私は関係によって隣接する体系を理解するのである。換言するなら、全て

がそこで完成されて何も始まらないのだ。それは堕落の法則が大変良く説明していることである。　《閉じられた体系》　この法則が説明していることを私は疑っている。それは閉じられた体系の中で起こるどんなことも、それ自体を外部の関係に従わせている。色々な出来事は、そこでは数々の相違の結果であり、何時までも囲いによって変化を与えることが出来ないのだ。閉じられた体系が慣性に達するのは、それ故に既に部分部分の慣性と、部分の中の部分によっているのである。それが閉じられている限り、最早変化しないと理解することである。私はこの困難な観念を支配する処ではないが、我々に熱を表す運動における分子の中に一つの事例を見るし、その絶え間ない環境は結局のところ変化のない温度によって表されるのである。従って冷たさから暖かさを生む天才を想像することは偶然ではない。それは神秘な性質への変転でしかない。恐らくもっと正確に言いたければ、閉じられた体系には決して特性が無いのである。その様なものは隠された観念であり、そこへ盲目的に進むか、唯一の技術によるのであると私は推測している。その代わりに悟性はここで不可分の関係を発見するのである」

《太陽》　ルブランは答えました、「私はもうそのことを尋ねません。というのも今、私は何ものでもない一点を十分に考えなければならないからです。如何なる事物も生産したり伝えたりすることしか行いません。太陽は瓦解とか収縮の中心でしかありません。独立した太陽を如何に理解すれば良いのでしょうか」

私は言いました、「谷の無い山です。この古い比較はここに住居を発見しますが、それがやっとです」

《砂丘》　これらの独白は、もし言えるとするなら、その循環の間、金色で足元が柔軟な砂丘の上でお互いに交わし合いました。砂丘以上に明らかに流動的なものはあるでしょうか。風は砂の雲をまき散らし、草は時々半分程覆われていますが、頂から再び広がっているのは最も驚くべき組織体を形作っているからです。そこから私たちは砂という固体で出来た波の上を歩きましたが、それは私たちの足での歩行を続けるための固体です。しかし束の間でもなく半神は、私たちが水の波を見る様に転がって流れて行くのを見ることが出来るでしょう。田舎の人は、古くからある河口や、今は隠れて仕舞った港や、葦で源流が見えにくくなっている川を、伝統に倣って描きました。そのことを探究して是非とも必要としなければならないでしょうし、一言で言うと、変化の中でしか不変のものを思考しなければならないでしょう。私としてはこの偉大な観念まで未だ行っておりませんでした。私は半分理解しただけで十分満足しました。約束している思想を将来に延期すること、それが最も美しい一日の仕事の目的ではないでしょうか。（完）

（１）ピュロス（前三一八頃～前二七二）は、エペイロス王（在位前二九五～前二七二）で々ローマ軍と戦い、多大な犠牲を払い勝利した。ピュロスの勝利とは引き合わない勝利をいう。

（２）熱力学の第二法則とは、熱の移動の方向は高温から低温の物体へ向かうこと。

（３）エントロピーは、物理体系の無秩序を表し散逸の原理を示す係数である。ある系の状態 A から他の状態 B へ移る時、その系の絶対温度 T と、その変化の際に吸収する熱量を Q とすると、Q ／ T の値だけエントロピーが変化したという。

第六の対話

《模写》　私たちは新しい囚人です。細かい雨があらゆる視界を妨げています。至る所が沈黙しています。これは私たちの思想のイマージュではないでしょうか。画家は、自分の絵の中の一枚を模写しました。彼は言いました、「模写の模写は何ものでもない。私が岩の瘤やギザギザを知覚する時、手は自然と目の動きに続くのである。私は想像力によって把握し、ねじ曲げて、しがみつくのだ。そこから鉛筆とか絵筆が動物の様に動くのである。しかし絵を見て描く素描は、それと同一程度の力が少しも無いのである。従って模写する者の素描は、作風の形式に戻るのである。手によって曲がりくねったものは、自然を消し去るのだ」

私は彼に言いました、「それは自然の形式というものの理屈は決してないのです。寧ろ原因というものです。つまり踊っている様であり、かき混ぜて、ぶつかって、擦って、磨り減った分子の多くの衝撃で如何なる循環も再開も無いのです。私たちの思想に倣って言うと、それは水滴を連動させる波です。しかし、存在に倣えば各々の小さな水滴は波のことは分からずに逃げ去って行き、滑り込み、ぶつかり合っているのです。　《混沌》　これは混沌を生んでいるのです。もしも手がぶつけられたり、ぶつけられそうにならなくても、手は決して模倣しないのです。自然が私たちの行為を砕く様に、自然は私たちの観念も砕きます。直線を思考することが出来ても、直線を歩き回ることは出来ません。世界には法則がありません」

老人は言いました、「そのこと自体が世界の法則である。我々の線は思い出して線自体を模倣するのだ。自然には記憶は無い。類似した二つの波というものは決して無いのだ。ところで、この考察も自然のしるしも、理性は模倣出来ない。ライプニッツのモナドは、素晴らしく同形であり、世界の単位であり、全てのものを知覚して多様性における一致を導いている。存在はその時、本質の中で失われるのだ。反対に、道具としての悟性の尖端がここで打ち込む時、良く理解されて力強く維持されている慣性が、如何にして純粋な存在を説明するのかを知覚するための一点に々私はいるのである。原子とは少なくとも内部の性質の全てではないし、決して他の数々の原子によって衝突を生むものと、別のものでもないのだ。それは又、月とか太陽と共にその原子が純粋な存在の観念に関する最良の観念を与える別の伝達でもないのだ。次の二つの状況の下で忘れ易いのである。一つ目は、原子が一つの観念でしかないことである。つまり現実の全ての部分が外部の同一の法則によって支配された世界それ自体であり、内部のものでさえある如何なる事物の性質も、観念の外にあることである。二つ目は、十分に注意すべきことであるが、小部分の他の小部分に対する衝撃は、他の衝撃そのものに依存していて従って際限が無いのである。　《無限》　無限とは、時々間違った無限性が命名されていて、完全に不十分なものとか純粋な物質でしかないものであって、諸観念に対する一つの偉大な観念になっていて、まさに敵対するものを表しており、結局のところ事物を表しているのだ。多分、これらが私の言いたいことである。何故なら、この剥き出しの観念は茫然とさせるからである」

ルブランは言いました、「結構です。従って世界は、その理屈で行くと靄になるでしょうし、今日その姿を現している様なものです。しかし、衝撃とは何でしょうか。衝撃を起こすのは何でしょうか。私たちのどんな物理学もここでは失敗します」

老人は言いました、「私には分からない。恐らく、原子も無く直線も無い世界には最早、衝撃も無いのだ。衝撃は外部の必然性しか説明しない。そして外部の必然性というこの言葉を良く理解してほしい。それは、角度や梃子の様にその出会いが何も変形させないし、デカルトに倣っての計画に対する考察における様に、単なる運動の方向転換や構成によって表現されることを要求するのである。　《永遠のもの》　そして続けて大胆にも言うと、この観念は、全てが外部にあっても、純粋な出会いである世界そのものの中に我々を投げ入れるものである。平均の観念や要約された観念は実地家の観念であり、決してあり得ない同質のも

のを思考することに私を容易に立ち戻らせる。それは現実の世界の概念が鈍くなった様に陥る原因でもあると、少なくとも私は認めるのである」

私は話を遮って言いました、「ピュロニズム（懐疑主義）は実地家にとっての真実に違いありません」

老人は答えました、「反対に、極めて軽蔑されている悟性の諸観念が全て存在に向けられていて、外部へのこの研究によって間違いなくその存在を表すのに何時も如何に貢献しているのかに私は驚嘆している。そして大変に明らかな幾何学的な固体というこの概念によって、精神は対象を手に入れるのだ」

ルブランが言いました、「無限の観念です。昨晩の閉じられた体形のあの観念に戻りながら、直ぐに永遠の水準を理解し、可能なものは何でもあり、奇妙な限定によるしか豊かにならない閉じられた体形のあの三角形まで私が遡及したとあなたは信じているのでしょうか」

《爆弾》　私は要求しました、「しかし、あなたは決してそこに止まっていませんでした。あなたは熱量測定の爆弾に近づいたのであると私は完全に理解しています。つまり明確なことです」

ルブランは答えました、「もっと正確に言うなら、私は外部のどの様な関係からもドアを閉じてその中で跳んだのです。そして落下する様に、そして穴の状態から見るとか様々に相違した水準の様にしか、この世界では何も行動しないことを私は心に言いました。例えば変化の無い熱は何も生みません。他の物体と如何なるコミュニケーションも無く帯電した物体は一杯でしかも多くても十分でなく、少しも重要でありません。それらの表現は少しの意味さえも無いのです。ところが、私の熱量測定の爆弾において良く見たのは、熱のものであろうと、電気のものであろうと、力学的な仕事のものであろうと、全ての穴が埋まっていることです。私は波の様な揺れを既に認めました。　《出来事》　しかし、全てが自らの上に戻っていました。それらの壁は、完全に全てのものに不浸透性を想定させたものであり、内部と外部の間にどんな水準の相違も取り除きました。従って、これらの境界によって全ての者は休息に行った時の様に私には見えましたし、私の閉じられた体形もそこから最早抜け出ない様に思えました」

私は付け加えて言いました、「それは結局、自らの裡で理解される事物は少しも変わらないし、その反対にその存在の中で確立されているということです」

老人は再び言いました、「兎に角、それは本質でしかなく、決して存在しないのだ。存在することとは依存することであり、外部の波に打たれることである。我々の観念には決して出来事はないし、そのことは出来事を間違って定めることもない」

ルブランは言いました、「周囲の無限の世界による出来事でしょうか」

老人は答えました、「性急すぎる。軽率な省略によるばかりでここには無限は無いのだ。単純に事物は押し進めるし、事物自体は押されもする。存在がそこで推測する他者は色々あっても、悟性にとってのその他は決して無いのだ。　《冒険》　それが遅鈍な実地家の目に見えないとしても、周囲の状況は人が遠ざかって行くにつれても重要性を決して見失うことはない。存在は常に存在を仮定していて、何時も存在の外にあり、他者でもある。それなのにそこには存在があるのだ」

ルブランは言いました、「流体であり、偽りのものです。普通の人がこの考えを支持するか私には分かりません。もしも人々が納得したなら、株式市場の大きな動きになるでしょう」

老人は答えました、「その人を観察することがなくても、私はそれを信じたのだ。現実には我々は実際に滑稽な予想も一体となって生活しているが、それらを誰も信じていないのだ。シーザーは何本もの短刀を用意していなかったのである。それなのに彼自身の死ぬ日を誰が予想したのであろうか。私は若かった頃の歴史にとっての一種の規定を作り上げるが、それは出来事が起きても決して予想されたことではないというものである。現実として人々は大陸よりも容易に大洋を横断する。　《仮説》　人々はその時、未来を知ることがなくても変化には力強く、全く近い未来へ進むのである。航海は幸いにも岩礁などの衝撃に先ず支配されることがない。流体の世界は我々を予想から洗い落としてくれる。人々を怯えさせて悲しげに

するのは、人々が予想する術を知らない未来はそれでも予想させるものであると想像することである。それは混乱した観念であり、悟性が色々な干渉を学んでいたなら消すに違いないものであり、あなたがルブランに言っている様に、そこでは何も起きない閉じられた体形を思考することから免れているのであり、既にそこでは全てが起きていたのである。閉ざさないことが精神の救済になるのだ。そして行為も又そこのドアを通るのだ」

私は尋ねました、「しかしながら必然性は悟性のものではありませんか」

老人は答えました、「必然性とは悟性が絶えず二つに切ることである。何故なら、観念の必然性は仮説であるからだ。　《依存》　もしも私が三角形を仮定したなら、全ての直線は必然的に繋がっている。しかし、この必然性は三角形以外のものは最早存在していないのだ。それなのに現実の必然性に関しては、或る任意の事物から他の色々な事物に対して依存しているものでしかないのである」

私は付け加えて言いました、「仮説を実現させることでもあります」

老人は言いました、「ここを良く見詰めてみよう。家具が持ち上がるのは、楔が変形しない斜面であるからだ。しかし、定理では何も持ち上げていない。何らかのことを行うのは、ここでは楔、家具、床、ハンマー、叩く人間とその時間との結合である。そして、それらの条件の一つ一つは、建てられた家、運送が行われたこと、間違って何度も行った進路誘導、製造された家具、伐られて最初はしっかりした樹木、そして同様にその他の数々のものに依存しているのである。定理はこの依存を読むことが可能でも、決して行うことはない。しかし定理は他のものを良く説明することもあるだろう。アルキメデスの原理があらゆる航海の法則になると私が言ったのと同じだが、同様にあらゆる船の遭難の法則にもなるのである。これは我々を支える定理の必然性ではない。反対にその必然性を道具の様に支えているのは我々である。　《現実》　しかし私自身として気付いた精神はそこに滑る様に進み、事物の必然性の代わりをしている。それは純粋な出来事であり、単純な出会いでもある。精神は、観念の必然性に対して戦うことが出来ないと思う」

老人は付け加えて言いました、「そうである。人々は心を捕らえられてこの罠にも再び捕らえられるが、その様な出会いにおいて彼らが死ぬとか救われるのと同じ必然性である。この致命的な観念に突然襲われるのである。それは三角形の三つの角が二本ずつの直線を同時に作っているとか、円周率の小数の数字がその様に後に続くことでもある。彼らは、それらの計算をしたり、長さを測ったり、重さを量ったりした外観がどんなものでも、積極的な存在も独自の活動も最早期待しないし、その働きはそれらの非情さを引き出しているが、それでも重要なものになっている。存在することとは、それが何であるのかを知らないことから生じるのだ」

私たちは僅かな雨音を静かに聞いて、近くの海を想像していました。　《旅》　私としては大変に敏感で何時も脅しているこの思索家に更に質問しました。私たちは自ら当てのない旅をする乗客の様に感じていました。私がそれ自体で大変に雄弁な思想を何らかの言葉に纏めた後で、私の考えをそれらの用語で追い求めて言いました。「今では私に慣れた経験に倣って、見知らぬ未来であり急迫して予見出来ない戦いでもあるこの当てのない旅の観念が、悲しみの跡を全然持たないことを私は知っています。私たちを不都合な瞬間で悩ませるのは宿命であり、幻想的な概念です。世界は々私たちを悩ませます。そして最後には存在へ駆り立てますが、波が船を攻撃する様に、他のどんな方法によっても駆り立てます。嘗てあなたは言っていましたが、出来事は予想されたものではありません。未来に対するこの見方は慰めになりますし、立て直すものでもあります。継続されて予想されている幸福は退屈にさせます。小説『赤と黒』のマチルドは希望の中で退屈していた、とスタンダールは言いました。　《心》　大変に規則正しいこの未来は、私たちには全てが重荷を背負ってきちんと固定させられているものに近づいている様に見えますが、私たちは決してそれを愛しません。大変に詳しく吟味されたこの考察は、今度は私たちの苦痛を明らかにする番でもあります。それは私たちがそれらの苦痛を進行中であると想像する限り、どんな重荷も背負ってきちんと

固定されているのであり、恰も馬車の中で文字を読む様に、そこではそれらの苦痛が私たちを悩ませます。不都合な通行において誰もが現代の状況に従って自らの生涯を想像します。彼が今存在することから、これから存在するであろうことを幾何学者として推論します。苦痛の時には退屈は少しもありません。苦痛は殆ど全体のものであり、退屈は専ら想像上のものです。そして、私が予見出来ない出来事をその様にして惨めに予想しようと努めたり、他のものではあり得ないで、その様なものでなければならないことを私に説明しようと努める時、私が理性の働きによって存在を拵えながら私が試みることは、一種の存在論の論証ではないのでしょうか。かくして私たちの苦しみは未来を作り上げます。しかし苦しんでいる君には静かであって欲しいのです。他のものもあるでしょうし、やはり他のものなのです。悲しみは、水上のさざ波でしかないのですから、この悲しみを君は急いで楽しんで下さい。大きな苦労は私たちを慰めることが出来ます。失望に耐える人を想像して下さい。それは既に彼の背後にありますが、彼は目の前で見ています。その瞬間に火事が財産も生命も危険な状態にすることを仮定してみましょう。失望は忘れられます」

《季節》　私が話をしていた間に、西の空は更に明るくなって来ました。快い風が、雨と低く垂れ込めた雲を一緒に運んで行きました。太陽が殆ど直ぐさまアザミを宝石の様に輝かせました。

老人は言いました、「この空は我々に教えてくれる様になった。何故なら最も明白な法則は、私たちが法則で発見することは出来ないということであるからだ。全てがそこに運ばれて来るし、その上全てがそこにやって来る。季節は手段でしかない。低い空がきれいに掃除されるのは、嘗ては決して可能でない様に思われた。しかし、これ以上に単純なことは何も無い。もしも至る所でこの変化が認められたなら、もっと良く理解されるに違いない。というのも、我々は雨が止まないことを抽象的に曖昧に言うからだ。実際にはどんな雨も止むし、再び降る他の雨もある。　《哲学者たち》　そして我々が言った様に、雲が消えないことも一度もないのだ。同様に我々の悲しみにおいても、それらの悲しみが変えられたり、消されたり、刻一刻と慰められることに我々は決して気付かないのだ。我々はそれらを取り戻すために虚しく働いているのである。そして、この執拗さが形而上学になるのだ。我々は出来事でしかないものを本質として考えたいと思っている。人々は全員が哲学者である。物理学者はごく少ないのである」

ルブランは言いました、「物理学者のごく少ない者が、物理学者でいます。それというのも彼らは殆ど全てをそこから言う様になるからです。雨とは何か。波とは何かの結果はこの通りです。彼らの世界は要約されたものでしかなく、自分に等しい何らかのものであって如何なる未来もありません。永遠に繰返すために黙考する人であると、思っているこれらの人々の奇妙な好みに私は気付きました。それはまさに正確に存在を忘れることです。スタンダールが言った様に、希望の裡に退屈することです。その時は驚嘆すべきこの世界が新しい手掛りで既に私たちを把握し、新しい冒険を提供しているのです。しかし私は物理学者の退屈を打ち破ります。私を支えるのはそれらの法則ではなくて出会いであり、この思想がその度に私に教えてくれることを私は繰返し言います。私を濡らすのは凝結の法則ではないのです。もしも雨が降っている時に家の中にいたなら、私は濡れずに乾いています。ところで、私はその時に何故家にいるのでしょうか。次の様な別の時には私は外にいたのです。その時私は建具屋と出会ったのですが、一緒に私は家に帰りました。彼自身は他の人と会ってからそこの場所にやって来たのです。それなのに帰ってみると鎧戸は良く仕舞っていませんでした。それは雨や風のせいだったのです。　《ラヴァイヤック》　もしも暗殺者のラヴァイヤックが短刀をアンリ四世の胸から一メートル以上離れていたなら、事件は別の扱いになっていたでしょう。全く反対に全ては避けられずに必然的に引き出されますし、未来は私たちを事実そのものに近づけます。私には何時も分かっていることです」

《可能事》　老人は言いました、「我々はここに極端にぶつかるが、それは奇妙な観念である。我々は一般に幾つかの可能事を考えるが、可能なことはその中の一つだけであると同時に、その可能なことを消すことも肯定している。そして、以上は少なくとも本質に相応しい観念をこの事件に移すことでもある。三角

形が、等しい二つの角を持つことはあり得るし、そうでないこともあり得る。それは私の気に入るのと同じで、この二つの可能事も同様に絶えず可能であるが、ここには存在がないということである。その反対に存在における可能事は実際には不可能である。例えば今、雨が降っていたのは可能なことかも知れないと私は言う。しかし、雨は降っていないので、可能でないことを私は良く知っている。それに反して存在におけるこの不可能事は、円周率の計算が終了されるとか、三角形には三つの直角があるのは不可能である、という意味での不可能事ではない。　《事実》　世界の不可能事は、同様に世界の可能事でもある。我々がその時に現実から常に可能事へ理性を働かせるが、それはラヴァイヤックの一撃ももう少しで不可能事になったと言うからである。しかし、我々の証拠とはどんなものだろうか。それは事実のものである。そのことは不可能事でもあった。それは唯一の証拠であり、それで十分であり、ラヴァイヤックが決して自分の一撃を失敗しなかったことでもある。そして、この観念が如何にして発展するのかは次のとおりである。前者のラヴァイヤックの前には世界のもう一つの状態がなければならなかったに違いない。しかし、この言い方は余りに抽象的である。ナイフとか鎧とか馬車とか番人たちの位置が他にもなければならなかったに違いない。でもそれは、条件が実在したので、それが唯一の可能事であったことを何時も我々のうちの誰もが言っていることについて、同一種類のものに関しても別の条件を仮定することでもある。かくして我々は、事実の中に可能事と不可能事を追い掛けているのであり、存在と唯一の可能事と他の色々な可能事しか決して見出さずにいて、直ぐに不可能事を判断するのは、それらの不可能事が存在していなかったからである」

《不可能事》　ルブランは言いました、「そして、この探究によって私たちは予め全てを規定する本質の必然性を決して見出していません。そして実を言えば、それは時間を取り除いております。その時には何も存在していませんが、全ての結果が真の全体になります。その代わりに、その存在に従って現実のものでしかない、絶対的に可能なものがあります」

私は言いました、「私たちは困難の中心におります。近づいて見てみましょう。私が家具の下に楔を押し入れると、その様に削られた楔という固体は本質的に法則に従う様に私には思えます。例えば、この楔が水平に動かす道を作る限り、垂直に家具を動かすことは不可能であり、それは楔によって攻勢になる角度の活用から生じます。同様にそこには存在の不可能事はないのでしょうか」

老人は沈黙を守っていました。そして彼と同様に私たちも全員が、数々の観念を極めて単純な事例として集めました。それは、考察をより一層容易にすることはありませんでしたし、まさにその反対でした。ルブランはこの狭い領域についての検討を敢えて持ち込みました。

《推論すること》　ルブランは言いました、「あなたがお話している垂直運動は、水平方向に楔を移動するのと等しく、存在としては不可能事であると私は否定します。その瞬間の地面の隆起を仮定しましょう」

私は言いました、「しかし私たちが明らかにした二つの運動を除いて、全てが等しいものであると私たちは仮定します」

ルブランは答えました、「あなたには、閉じられた体形に存在を制限する権利がありません。閉じられた体形には決して存在しません。洋服ダンスと楔は地表に対して一緒に回転します。それらが如何に移動させられるのかを誰が知っているのでしょう。このメートル尺が変わらない様に不動が仮定された軸を選択しなければなりませんし、それは存在の代わりに本質を用いることでもあります」

老人は言いました、「恐らく、存在に関して最も明瞭な観念は、何も無視することが出来ないことである」

私は付け加えて言いました、「推論する代わりに確認するための状態に私たちを戻すことです。　《知恵》

存在は、存在の中でしか可能事を受入れません。あるいは、もしお望みなら、あなたは存在における可能事が実際の可能事になります。つまり可能事よりも非常に実現可能なものです。大地は瞬間的に震えるかも知れません。しかし、それを言うと事件になると理解しましょう」

老人は言いました、「昨日まで我々を専念させていた原因に関するこの困難さを、別の言葉によってここでは少しも再発見しないのだろうか。もしも原因があったならば、結果は単に可能事ではなくて現実のものになるのだ」。彼は言い足しました、「しかし、そのことは弁証法に過ぎない。事件が本質の法則に従うと言えることにどんな意味があるのか点検しなければならない」

私たちは待ちました。理解の光は、私たちの回り道の中では知恵の集大成しか私たちにやって来ることが出来ませんでした。何故なら、その点において私たちのその場限りの思想は滅びるからです。沈黙が続いた後で老人は、自分自身に話す様にして再び言いました、「私は最初に滑稽に思える様なことを言うだろう。　《条件》　完全な楔は変形しないものである。つまり表面も角も大きさも不変に違いない。ところが、私はそこから何を消去するのだろうか。楔の本質はその中に隠されているであろうし、私の手が何らかの対象を押したり、何らかのものを抑え付けたり私に見える様に、いわば楔の奥から押しているに違いない。私がここに悟性の法則と名付けるものは、外部の状況から少しも生じない変化というものを否定するものである。私は変化を不変の状態に帰すのである。そして実在する対象を欠くことからは十分に離れて私がそれに成功する限り、反対に私は変化を見出すのだ。存在するものとは、事物にぶつかったり押したり移動させたりする、周囲の全ての事物のうちの一つの事物についての結果である。これらの全ての関係は思考される、と私は言ったのであり、我々はそこで身に付けたものしか見出さないのだ。角度の数値に倣って楔を思考すること、一センチメートル移動するために重荷を一ミリメートル持ち上げるのを言うこと、それは同一のことを思考するものである。　《巻揚機》　この運動は、動く事物が少しも中から動くのではなく、あるいはお望みなら、少しも秘密の運動になることがないから、不思議なものは少しも無いのだ。形状の法則に従って持ち上げない楔は、衝撃によってすり減ったり形を変えたりするに違いない。私が、滑ることもなく伸ばせない紐に一個の滑車を考えようとしたり、同時に紐の一方の端がもう一方の端と同じ道を辿らないことを理解しようとしても無駄である。同様に揚巻機にとっては私が言った不変の状況を考えることは出来ないし、同時に引っ張り上げるのは私の手によって動き回る道は、引っ張り上げられた事物によって動き回る道の二倍ではないと私は考えることも出来ないのである。ここではより一層の注意が必要である。揚巻機は単に揚巻機の法則に従わないとか、楔も楔の法則に従わないと、もしも私が考えたいなら、変わることのない形式の詳細調査においては何らかの変化を除いて探究しに行かなければならない。それというのも、楔にとって垂直に動く道は、楔の作る窪みによってしか近道になり得ないし、あるいは楔による隆起とか、まさに楔と持ち上げる家具とのある程度の分離によってしか道を伸ばすことが出来ないのだ。　《ヒューム》　私は距離そのものにむらがあるものとして、距離を思考することが出来ない。それ故にヒューム（１）の様に、家具の運動に対しての楔の運動の効果は直ぐに純粋に急な変化になると私が言いたい時、私は思考する何事かを更に言わなければならないが、単に僅かな言葉ではない。それはまるで私が、決定された運動はどんな風にでも継続することが出来ると仮定したがっていた様なものである。そのことを思考するために私は何らかの内部原因を想像しなければならない。つまり私が存在のための諸条件の外部に飛び込まなければならないのである。そして私は、外部原因に関して数多くのことを知っているし、幾何学や力学に従ってそれらを表すが、又は何も思考しないことになる。その様にして存在に従ってこの楔を思考するので、私は二つの事柄を一緒に理解する。第一には、完全な楔とか、閉じられた変形しない体系とかは存在しないことである。従って楔の法則と比べれば、これらの隔たりは他のものの形状にそれら自体を依存しているのである。そして、それは急な変化を取り除いているのである。つまりそれは常に内部の本質であり、換言すれば隠れた性質である。物体は落下する。私は落下の法則によって思考することしか出来ないが、物体にはこれと同一の法則が無いのだ。　《ルクレティウス》　ルクレティウス（２）が仮定しているあのクリナメン（３）は、力学的軌道から離れている内部の規定であり、人が知ることが出来ることは絶対に何も無いのである。しかし、他の面から私は存在する物体がこの世界

で落下することも良く知っているし、その物体は決して思考された軌道に従わないだろう。少なくとも私は、出会いとか摩擦とか衝撃とか、人が言いたい様な存在する他の物体や、他のものによって曲げられた物体そのものによる以外に決して説明しないことも良く知っている。従って存在の法則は、私の幾何学が不十分であると叩き、それと同時に幾何学が世界の女王であることを仕舞い込むのである。そこからやって来るのは、あらゆる例外を前にして、つまり不可解な行為のどんな外観でも前にして、変化しないで或るものを他のものに移動させる何らかの要素を私は直ぐに探究することである。私は原子を思考するに過ぎないが、原子の中を思考するのである。それにしても数々の原子の中で思考するに過ぎないのである。例えば、私がその楔を変形しないですり切れないと思考する限り、その楔は一つの原子である。そして今度は変形してすり切れるものの番であるが、変形しないで外部の法則に従う他の色々な原子も仮定するのだろう。何故だろうか。何故なら探究するこの方法は、剥き出しの存在の法則そのものを表しているからだ。取るに足りない対象の変化において私が常に仮定するのは、その反対は何のためにもなっていないことである。私は、単に他者たちによって押されている対象を直ぐに探究するだろう。というのも、そのことが対象になるからだ。こんなに話が長くなり曖昧になって仕舞って許して欲しい。私が換言して言いたいのは、関係とは存在の法則であり、その内属はその存在の法則を否定することである。　《内属》　内属とは、対象が対象そのものによって知ることであり、対象が唯一のものに違いない時である。存在を消すのは仮定であることに注意を払って欲しい」

私は話を遮って言いました、「そして本質も又消します」

老人は答えました、「そこには一点がある。我々がその観念を形作る限りは本質になる。例えば、三角形の本質とか円の本質とは、外部との関係で変わることである。本質は存在を求めると私は言いたい。例えば、直線は内属によって左右されない。でも、直線にはその外に全ての効力があるのだ。そのことから直線は存在の諸形式の中で最も単純なものになる。直線は我々を世界に運んでくれるのである。しかしながら今まで我々が言って来た様に、我々は直線を存在させることが出来ないのだ。直線を描くのは不可能である。しかしながら距離の法則は世界の法則ではないと、あなた方は言わない」

ルブランは言いました、「数々の点を仮定する限りはそう言います」

老人は付け加えて言いました、「そして、点の内部は決して一点ではないので、それは距離の体系によって表されるのであり、従って際限が無いのである」

今度は私が言う番でした、「従って点の内部は、諸事物が少しも法則に従わない場合は決して生じないでしょう」

老人が言いました、「正確に言うと、諸事物が法則に従う場合も決して生じないからだ」

ルブランが言いました、「例外は同一の規則によって予測されます」

《外部》　私は言いました、「そして、出来事しかないことが分かるのは本質によってです。私はここに何らかの観念の重要性に気付く様に思われます」

老人は言いました、「悟性が全てである。我々がその根源を探究する観念は、世界への探究というものの結果によって現れるのだ。確認する術を知る幾何学者の精神があるだけである。証拠に対する我々の体系は事実の体系も明らかにするのだ。要するに諸事物が外部の法則に従うのを良く理解することは、諸事物が統制されない儘決して法則が無いのを理解することと同じである。　《鮫》　人間は海水に落ち、そこには鮫がいる。その人間は、鮫の顎が強力であるから喰われて仕舞うことを意味するだろう。しかし、そのことは人間が常に鮫の餌食であることを少なくとも説明することになるに違いない。実在する原因とは、鮫がそこにいたことである。それでもその瞬間に鮫がそこにいたのは、単に鮫の性質によるのではなく、鮫の行動と反応の結果と魚の群と海流と潮によるものである。それから同様に、その人間が海水に落ちた結果でもある。何故その場所に海水があり、その瞬間なのであろうか。確かにそれは、彼が鮫よりも弱くて

も、その瞬間に海水に落ちる理由ではないのである。その出来事は全てが諸法則に従っているが、諸法則がその出来事を説明するものではない。寧ろ、諸法則がその出来事を見せるのは、本質によっての説明はし難く、あるが儘に全くの偶然の出来事なのである。　《神話》　幾何学的でない精神は決して偶然の出来事と考えないのだ。それ故に、ご存じの様に幾何学は神話を排除している。つまり意志や運命と類似のものを排除しているのであり、この除去によって世界の認識が把握されるのである。勿論、この厳格な観念は常に忘れられている」

私は言いました、「忍耐強くしなければならないし、一度ならずそこに戻らなければなりません」

ルブランは言いました、「幾何学の綿密さだけで最小の部分まで世界が広がっているのを時々私には見えた様に思われます。確かに私は一定の点だけで済ませませんでしたし、白の上に黒を知覚したと言いますが、私の探究に関するどんな法則も、性質に関するこれらの小さな含みを考慮に入れないものでした。それらの詳細調査は未だ行われていませんでしたし、広がってもいませんでした。ところが、これらの抽象的な活動の方向は物理学者と化学者の方だけに向いていました。そして何時もそれらの要素を出来る限り綿密に調べて、一つの形式でないものであることはこの上なくはっきりしているのです。しかし、この本質的な幾何学をもっと適切に示すなら、それはデカルトが延長と名付けた非常に隠された概念に対応するもので、生物学の探究においても本質のこちら側にこの幾何学をもっと適切に示すものです。　《ダーウィン》

ダーウィンは未だその大きさが分からない人物です。彼の考えは訳が分からなくなる多くの議論によって、殆どが包み隠されています。数々の問題は決定していません。そして、その考察は私たちがそれを完成させている今でも、驚かせるかも知れません。問題は継続させることが重要です。つまり観察出来る世界にすることです。ところが、博物学者のキュヴィエやラマルクによると生物の世界は、未だ観察出来るものになっていないのです。ライオンは事実になっていません。鮫も事実になっていません。ライオンは自給自足出来てその中でやって行ける様に見えます。この種の生産は生物学を明らかにすると、良く言われています。私が見る処では、そしてこれらの対話で言われて繰返し言われた後では、それは常に内属が戻って来ることでしかなく、それは内属が金を評価する純真な物理学者の精神に戻り、いわば内部の重さを感じる様なもので、金の一片が性質として彼と一緒に身に付いているのです。そして、三角形と円を異なる種類として、それらの裡にある特性によって注目すべきものとして完全で十分な存在と見做すことが出来る時、内属は疲れた幾何学者の精神に戻ることさえあります。本当の処、積極的な幾何学者で世界の側に自ら幾何学を推し進める者の前では、三角形と円はそれら自体によって決して存在するものではありません。それらの特性は他のものとの関係です。　《円錐曲線》　例えば、円にはもっと良い誕生を再発見します。円錐曲線の中で同類のものに出会う時に、より一層自然なものを私は思い切って言います。それはあらゆる出会いが形となって生まれる曲線であり、平面と円錐形の二つの広がりとの間で可能な全ての方法によるものです。そしてダーウィンは地面と水と空気と岩と泥と全てのものの一種の交わりによって生き物の一世代の概略を示そうと試みたのだと私には思われます。丈夫な翅のある昆虫と欠翅類の昆虫は、両方とも風の力を表しています。ずんぐりと太った狼は餌食の水牛を食べたことを表しています。そして競走犬のグレーハウンドも餌食のレイヨウを表しています。　《鳥》　この観念に倣うなら、体型と翼によって大気と重力を説明するものとして鳥のことを述べなければなりません。要するに、生き物の外部としての性質ならどの様なものでも述べなければなりません。少なくとも私たちには未だこの困難な分析の素描しかありません。私はそれを補助する方法を良く考えましたが、それは生まれ様としている個々の生き物たちに想定される多様性から引き出されて、それらの生き物たちの中の或るものたちに保存されていて、それらの生き物たちが生きなければならない環境そのものを最も良く表すものたちを知る術も良く考えました。そこでは私たちが、一種の原則によって内属を関係に従属させることはないのでしょうか。《選択》　その様な鳥の形状が生き残ることになるのは、決して何かがその形状を作るのではありません。

つまりその形状そのものに適合することであり、多少なりとも風によって齎され、目や爪による或る種の形状によって追い求められたものなのです。確かに、動物が自らに有利な様に小さな相違を偶然に持ったのは、これらの外部の状況からではありません。その様なものは内属の部分であり、それは如何なる研究にも決して除去されないものです。しかし、動物が相手に対して優位を占めるのは、つまり存在を支えているのは、まさにその様な敵や餌食や捉え難い環境である動物の奇妙な外部条件によるものです。でも、私が悟性を認めるこの厳格な方法によると、内属は可能な限り除去されるのは明白です」

老人が再び言いました、「かくして私が話した鮫の事例において私は、海藻の様に表されるものとして鮫を先ず考えなければならなかったし、鮫としては私が述べた出来事を生み出していたのである。しかし、鮫の形状そのものは、その同一の視線に従って分析されることも、この方法は示している。その様な鮫は出来事でしかなく、より濃密で変化しない渦巻でしかなく、そして決して鮫ではない色々な状況によって支えられるものとして鮫が保持された出来事でしかないことを示しているのである。その点について幾つもの反論が蠅の群の様に湧き上がり、我々には何人かの論争相手がここにいたとしても打ち破ることだろう。私は幾何学的な手掛りを何時も対象に向ける悟性への努力を、もう一度見分ける方が好きであり、それは外部を限定して内部を除去するものである」

《吝嗇家》　私は遮って言いました、「その様にして、その人物を人は知るのではないでしょうか。何故なら性格を推測したり、その進展に続くのは無駄な知識であるからです。例えば吝嗇家や野心家であっても、その人物と全ての事物との結合が欠如していれば、存在するものを何も発見しないからです。その代わりに如何にしてお金が吝嗇家を生み、如何にして成功が野心家を生むのかを注意しながら人は良く学びます」

《情熱》　ルブランは付け加えて言いました、「座っている人間は、立っている人間と同じ欲望も思想も無いと、あなたは簡単に言います。そして最良に判断される他の考察を、人々の内部を見抜くのを望む人々によるよりも、行動したり行動して来た人々や企業家たちや軍人たちや船乗りたちによって見分けて下さい。そして私は、命令の理論を決して無視しない将軍と知り合いになりましたが、その人の周囲に集団と武器と習慣がその様にして作られました。そこに私は既に悟性を再び発見します」

私は答えて言いました、「事実は私が言えない以上に、私はダーウィン説信奉者であるということです。行動においてもダーウィン信奉者そのものです。それは何時も試みていることであって、外部の関係による情熱と行動を偏見によっても説明するものです。しかしもう一度言いますが、成功は何も証明していないのです。私たちはそのことを十分に言って来た様に、悟性は絶えず世界を探究します。そして、それは同時にまさに悟性が人間を探究する時でもあります。悟性は存在へ行き、服装や行列に従って王を形作っているのであり、乞食になったならば、王に止まるための多くのものも尊重しません。それは対象として人間を理解することです。喧嘩をする相手がいないのに、喧嘩をする人とは何でしょうか。　《勇気》　世界というテキストの中に人間が知らされていないとするなら、人間のことを何が言えるのでしょうか。飲み物とか食べ物の変化や、泥と寒さによる睡眠不足や、その他沢山の原因が集団の価値を極めて素早く変えた時、勇気が英雄にとっての内属であると言えるのでしょうか。この種の考察は決して異議を唱えられません。人間に関する研究は、平和が迅速に確立される一種の避難所です。しかし、悟性を解放して自由にして下さい。外へ引っ張って下さい。圧倒的な勝利の連続で悟性を明らかにして下さい。直ぐに人々は無視して軽蔑します」

ルブランが言いました、「私には原因が分かる様に思えます。人間は計算しますし、重さを量ります。しかし自分自身をその様に扱う人間は何処にいるのでしょうか。内属はきっとその人に最後の避難所を見付けるのです」

《自由》　老人は言いました、「それから自由は恐らく唯一の神秘的性質のものである」

しかし、まさにこの点について私たちが更に考え様として一致して見出したのは、私たちの推論が少し締め切った嫌な匂いがしたことです。雲の切れ目が私たちを誘っていました。そして世界は至る所から私たちを光で一杯にして、口論から生まれた私たちのどんな思想も直ぐにきれいに洗い落としました。（完）

（１）ヒューム（一七一一～七六）は、英国の哲学者・歴史家で経験論に基づいている。
（２）ルクレティウス（前九八頃～前五五）は、古代ローマの哲学者・詩人でありエピクロス（前三四一～前二七〇）の思想を継ぎ『物の本性について』の哲学詩がある。
（３）クリナメンは、エピクロス原子論で不特定的に原子の運動方向に生じる微少な偏倚、原子の衝突及び結合を導く多様な自然の生成原理とされた。

第七の対話

海岸の高い絶壁から見ると、私たちの眼下には大きな鏡の様な海原がありました。老人は言いました、「画家の絶壁だ。我々はここで半透明の広がりを通して、その底を見分けるのだ。そこからの色彩の層と細長い跡は決して水の形状ではない。決して名を付けない様にしよう。数々の試行と修正によって如何なる思想も無く構成しよう。如何にして色彩が生まれるのかを画家が知ると、忽ち彼の色彩は偽りのものになる」

私はこれらの考察を利用することが出来なかった様です。何故なら、その日は私もパレットと絵筆を持っていたからです。　《概念によって》　そして私が気付いたことは、色彩の名を言うことなくパレットに絵の具を付けることが決してなかったことです。私は概念によって描いていたのであり、私の小さなパレットの板は絵の具のお喋りに過ぎませんでした。美しい瞬間は消えていましたので、処方箋は最早何もありませんでした。それ故私は、荷物を畳みながら声に出して考えました。

《言葉》　ルブランは言いました、「そうです。絵の具はその時、言葉になります。人は言葉を理解することが出来ますし、言葉を理解するのを楽しむことが出来ます。そして私たちには、絵画に一種の固有の真実がある様に神秘主義に固有の別種のものがあり、心理学者たちのパレットも同様であり、全ての二十歳の人々を変えます」

画家は言いました、「その条件では海原の色彩は服の色彩の様に、流行のものに違いない。しかし、ここでの私の喜びは気に入るものではない。この世界の前で、もしも私が最早体系のことを考えなかったなら、絵画での私の忍耐強い仕事において色彩のことを考えないのは幸いなことだ。でも、出来ないことである」

私は遮って言いました、「私には余りに新しい様に思える道によって、それでも私たちは競争の問題に及んだので出来ないことなのです」

ルブランは笑っていました。彼は言いました、「自由は如何にして諸現象の決定論と両立することが出来るのでしょうか」

《イフィゲネイア》　私は言いました、「これとは別に、観念の画家としてはイフィゲネイア（1）の犠牲の様なものがありますが、何という外部世界の存在でしょう」

老人は言いました、「けれども、もしも我々の新しい色彩によって、これらの古い問題が直ぐに認められたなら、決して顔を赤くする必要は無いのだ。そして先ず世界が、あるが如くに我々の言葉の中に現れなければならない。その後で私は、自由も又あるが如くに我々の言葉の中に現れるのを予想するのである」

ルブランは付け加えて言いました、「以上は、私が最も良い秩序と信じているものです。何故なら、自由は純粋な対象に対してのみ行使するのを誰もが良く感じているからです。私としても、それを知っていると私は信じます」

私は言いました、「そのことをあなたに教えたのは鉄筋コンクリートです。それ故に、この世界のものです。私たちはやがて世界を把握したのだと私には思えます」

《バークレー》　老人が付け加えて言いました、「そのことは証拠になる。まさにはっきりと私が気付くのは、この世界のうちの存在を証明するための努力に欠けているものは、世界そのものである。我々には数々の幽霊が現れ、そしてそれらの幽霊の一つとか、それらを欠かないその存在全てを増やしたいと思うのだ。何故なら、勿論その存在には幽霊が欠けているし、その証拠も欠けているからである。ここでバークレー（2）のことを考えなければならない。彼には無数の先駆者たちがいるし、多くの子供たちもいる。その懐疑的教義の著しい成功は、裁判の時の様に、証拠への注意が簡単に対象を我々に忘れさせているこ

とを示している。それでは弁護をするのは誰であろうか」

私は答えました、「私が良く弁護したいと思います。従って私は、存在への候補者として立候補するのはどんなことでも順番にあなたに提案するでしょう。ここで、この外観には何があるのでしょうか。先ずは色々な色彩と音と匂いと接触とこの種のものがあります。しかし、その結果を言わなければならないでしょうか。それは十分に容易ですし、余りに明らかです」

老人は言いました、「証拠の欠如と、欠陥による欠如を発見するまで、証拠を誠実に再発見しなければならないのだ」

私は再び言いました、「節度のある色彩から鮮やかな色彩へ変えさせながら、私はそれ故に同一の接触を証明します。更にその上、もし言えるとするなら、これらの対象は最も弱い段階でさえも苦しみと喜びを共にしています。それは、それらの対象が私自身の変化そのものであって、他の何ものでもありません」

《幻覚》　老人は言いました、「それから我々は、夢想や記憶や幻覚に関して古い証拠を無駄にしないことが出来る」

《観念論》　ルブランは言いました、「私は最早、幻覚が無いことを本で読みましたが、少なくとも幻覚を抱かせる話は幾らでもあります」

老人は言いました、「それは我々の時代の立派な表現であり、狂人たちを最早信じないことを定めた偉大な進歩の瞬間でもある。その上、我々にはこの種の証拠は必要ないし、最初の考察だけで十分である。眩暈は太陽の反映には無く、同様に手術用メスにも痛みは無いのだ」

私は言いました、「それ故に私は驚くべきものとして、この証拠をあなたに与えませんでした。びっくりする様なものは、これらの簡単な証拠の総計です。それ故に多少なりとも私を刺激して、少なくとも私の存在という何らかのものを私に示すこれらの全ての特性を私に思い出させたので、私は残されている無駄な広がりのものであってもあなたに考察する様に促します」

ルブランは言いました、「私たちには今後では既知の対象になりますが、今は決して対象ではありません」

《証拠》　老人は言いました、「その種の世界は、迅速に調整されるものとして理解しなさい。形状とか広がりや、運動や、この種の事物は少しも事物ではなく、思想である。内容とか中味なのである。つまり性質である。全てが一枚の布地であり、我々の夢という布地なのだ。そして最後に何があるのだろうか。その布地を破ろう」

ルブランは言いました、「その広がりに穴を開けるのですか」

私は言いました、「それらの性質を無しにするのですか」

老人は言いました、「二つとも不可能だ」

海の潮が岩場を襲っていました。何艘もの小舟が踊っている様に見えました。遠くで海水浴をしていた人々が、泡立つ波にぶつかって叫んだり笑ったりしていました。世界も又、私たちの証明を笑っていました。それらの証明は少しも真に受け取られていないことを哲学者たちは知っているのでしょうか。しかし、私たちは老人の方へ向きを変えさせられました。老人は立ち上がり、両手を風に差し出して握り、びっくりしていました。彼は暫くして言いました、「私はもう騙されないよ。存在の名に従って探究することは、少しも性質の有り様になっていないし、それらの性質を広げる幾何学上の織物にもなっていないのだ。それは、どんなものでも我々のものである。そして、決して我々のものでないものも我々は探究する。外部の必然性であり、対象であり、研究の支えであり、そこには我々が世界と名付けているものがある。　《運搬》　それらの性質は場所を課していて、それらの距離は骨の折れる運動による以外に変えられないのだ。この水が色づいていて新鮮で音を立てているに過ぎない限りは、決して存在しないのである。しかし君たちよ、この海の色でなくて砂の色に変え様として見給え。堤防が必要になるだろうし、石の運搬も必要になるだろう。一つの性質は他のものによってしか変わらないし、前者の一つの性質も他のものによるので

ある。そして労働力とは馬たちが行う様に引っ張らなければならないものだ。しかし、我々は想像上の事例を考え過ぎている。我々の状況そのものは、これらの石よりも取扱い易いと言われるだろうか。いいえ、言われないでしょう。もしも私が、荒野の外観を家の外観に変えたいなら、石を運搬する日々と石工としての日々を送らなければならない。　《関係》　シャベルと鶴嘴を扱うには、バークレーに対する尊敬を欠いていた。全てが司教の夕食の時の様に彼の処には可能であった。ところが、この世界はイマージュの遊戯ではないのだ。結局のところ全てはそこに止まり、私を支えているのである。海水浴をする人の身体は海水によって移動するが、海水はその代わりに海水浴をする人の身体を移動させるのである。そして最高の泳ぎ手はこれらに関係した努力が、ありもしない別の努力を行うことは出来ないのである。距離が無く形も無いそれは、全ての距離にも形にも関係していないのだ。以上のことは、残るどんなものとの関係にもよる最小部分との依存関係が世界とか存在というものである。というのも、これらの二つの言葉は分けることが出来ないからである。我々が望む存在とは繋がりであり、依存関係そのものである。何故なら、或る事物が存在しているのは赤いからではなくて、その赤があらゆる光と色彩に結び付いているからである。或る事物が丸いとか四角いから存在しているのではなくて、それらの形状は、全部含めて大体の処で一個ずつタイルを貼るのと同じ様にあらゆる形状を正確に嵌め込むからである」

私は言いました、「それは全てのものに慣れ親しんだ一般的な観念ですが、論理家は何時も忘れています」

老人は言いました、「論理家は他の者たちを継続的に除去することでは、その観念を決して発見しないし、悟性の進め方に従って発見するのである。神秘的性質は存在しないと人が言う時、言っていることを良く知らなければならない。事物の唯一の有り様によって可能なことは、存在することではない。　《揺れること》　しかし、或る事物の可能なことが、波の様に全てのものをぎっしり詰めて揺れることの中で、他の者たちを受入れることに帰するや否や、その時は存在が現れるのである。存在は、その様な事物とか別のものに属さないのである。存在は外部の関係でしかなく、その関係に従って存在でないものによる以外に、どんな事物のうちにも何も起こらないのだ。そして、我々が何時も他の事物に投げつけて、その際限の無い関係への適用によって我々はその存在を探究するのである。存在としての海は、人々の大地よりも良いイマージュで、諸事物の一つ一つが自らによって存在していることを々人は信じるであろう」

《夢想》　私は付け加えて言いました、「そうです。存在しないこととは、どんな風にでも変わることです。例えば、一メートル四方の岩を私が杖で支えて移動させるとか、同様に岩の下に息を吐いて移動させることです。従って、それは我々の夢想です」

老人も続けて言いました、「従って、それは夢想である。しかし、恐らくそれは何ものでもないことを確信するために、存在していないものをもっと追い詰めなければならないのだ。というのも結局、良く見る夢は何ものかになるに違いないからだ。何ものでもないものとは、その中に重さを持つ石であり、その中に色彩を持つ雲であり、それ自体で水に浮かぶ木材であり、それ自体で底に沈む鉄である。　《弁証法》　それは、それ自体から生まれて無くなる夜であり、欠けて行く月食であり、大地の目覚める春であり、結局はその様に無知によって知らされる世界そのものである。そこでは火山が突然に目覚める存在になり、雲は雷を放っている。そんな世界に人は住んでいない。しかし、そんな世界は人がいない単純な外観であると決して言わない様にしよう。何故なら外観ではないからだ。外観とは完全でぴったりとしたものである。外観は閉じ込めているものを示している。絶えず変わる海水が正確に浜辺と、最も小さな砂利の形状を表し、そしてそれと同時に潮と月と太陽を表すものとしてそれらの海水の繊細な縁を観察してくれ。外観は決して間違っていない。存在しないのは内属であり、自主性であり、内部変化であり、神である。そして、それは何でもないのだ」

ルブランは夢見ていましたが、何ものかが彼を晴れやかにすることでしょう。ルブランは言いました、「私は今の処、間違いを良く見るが、それは存在の証拠を探すことです。つまり存在するための幾つかの理

由から、存在するものへ移ることです。　《支離滅裂》　人は決してそれに成功しません。論争は批判されます。それは存在するための全ての理由が集められた時も決して存在を生まないことに注意を引きますし、存在論の証拠が何時もここにあるのです。少なくとも私が今もっと正確に理解している様に思えるのは、何故私たちが決して成功することにならないのかの理由です。事物の存在は決してその事物の性質とか要素によって定義されて明らかにされませんし、反対に何時も奇妙な状況によって定義されます。アルキメデスは、そのことを少しも知らない剣客に殺されます。この伝説は美しいものです。しかし伝説は理解を超えますから、その観念を十分に子細に検討しましょう。存在の秩序は正確には決して理由の無いものです。船乗りが海で死ぬ時、私たちは旅しか好きでなく、決して恐れなかったこの人物の内面によって存在に関する主要な挿話を説明出来る様に思えます。しかし、もしも彼が鉄道で死んだとしたなら、そして旅行者たちを追い込む不条理な習慣によって死んだとしたなら、その時私たちは驚くべき内属に驚嘆するでしょう」

私は遮って言いました、「驚くべき統合の人です。その存在はそこでは異常な人と思えますが、普通の人なのです。私たちを惑わせるものは、時として存在における見かけの理由になります。しかし自分の勇気で死ぬ人は又、もしもその出会いが別のものであったとしても、自分の勇気によっても良く逃げ出すことには注意したくないのです。従って事物には決してどんな理由も無いのですが、押したり押されたりして際限がありません」

《アムラン》　老人は言いました、「大変よろしい。その観念を加熱してくれ。それから加熱し直してくれ。それは腐敗しない悟性の学習に従って、その観念で世界そのものを思考することである。しかし我々は判断する様にして観察してくれ。我々は、顎髭のある水成論者（3）のアムラン（4）が一人の女性を救いたくて浜辺に沿った深い渦の中で死んだ様に、致命的な事故のことを言っているのであり、我々はそれが存在になったことを言っているのである。そして我々は、善良で勇気ある偉大な精神を引出しながら思考する、この人物や勇気のことと死の本質を思考するのである。そして、もしもその様な場所での死と、その様な時での死が、その様な人物にとっての本質であったなら、計算においては人に対して小数位の数を期待するのが本当である様に、確かにそこでは本質を期待するのが本当であろう。しかし、そういう訳には行かないのだ」

私は再び言いました、「スピノザは力強く示しましたが、人間が決して死なないことは少しも人間にとっての本質ではなく、決して病気にならないことも本質ではありません。そして私は、この考えが健全であるものとして々感嘆しました。人間は決して自殺しません。人間は殺されるのです。そうである、と哲学者スピノザは言いました。例え自分の胸に剣を自分自身で向けても、殺されるのです。何故なら自分の胸に向けるのは決して自分ではないからです。彼は生きることしか望みません。しかし、存在から追出されるのですが、それは存在理由に対してぶつけ合う少しも限度の無い事物によるものです。その反対に彼には、非常に奇妙なものですが、それらが両親の様に見える時もあります。　《ブルータス》　ブルータスはシーザーを殺すために生まれた様に見えます。しかし、熱が出て起き上がれないブルータスとか、口峡炎になっているシーザーを想像して下さい。あるいは単に歩いていて、果実を押し潰して滑らせた足を想像して下さい。以上はシーザーが死ぬとか、決して死なないということを引起こすのですが、私はその瞬間のことや、その方法のことを言っているのです」

老人は言いました、「ここでは予想を忘れている。それは一連の観念によって、出来事が起こるのを信じることに戻るものである。それは常に存在論的な証明でしかないが、我々にはもう一度裸の状態にして試すことでしかない」

《宿命》　ルブランは言いました、「宿命です」

老人は言いました、「注意しなさい。私は時々予見したが、宿命は他のことも意味していて、それは少なくとも道徳的秩序のことでもある。恰も人間は自分自身であり、偶然の諸事物に決して譲らないことを

誓ったかの如くである。ところが、存在する諸事物は非常に冷淡で、いわば強情な人間が自分の思想と関係した運命を見出すことで良くなる大洋の様に浮かんだものになる、と我々は言う様になるだろう。勿論、実際には宿命は自由意志と一つになるだろう。それは将来のことである」

私は付け加えて言いました、「何故なら、私たちの行動そのものが私たちを倒した瞬間から、石の様に転がります。良かれ悪しかれどうでも良いことです。善行は身体を変えません。善行は石の様に転がります。そして、この世界は完全な事実の場所です。私はそのことを良く知っています」

老人は再び言いました、「完全な事実である。　《ザディーグ》　もしも我々の計画が如何にして成功するのかを理解したいと思っても、恐らく最良の表現形式というものは無いのだ。何時も変形されるし、絶対的に変形させられるのだ。以上は、ザディーグ（5）が役に立ちたいと思いながらも害を与えたり、堕落したい人々を助ける世界である。しかし、この皮肉はここでは決して根拠が無いのだ。その人にとっては自分が存在することと、その属性の正確な意味を知ることが重要なのである。そこには彼が自分の生涯を学ぶものがあるが、決して十分ではないのだ。私は公正に振舞った人物に出会ったのだろうか」

私は言いました、「この漁師が帆を張って公正に振舞っているのは、波が悪か善を彼に望んでいるかどうか少しも分からないからです。彼は波を価値の無いものや、どんな力もあるものとして受取りますが、その波は何も言いませんし、予想することもありませんでした」

老人は言いました、「知ることだ。彼が少なくとも思考するものは、彼が思考するのを思考することであり、そこには或る意味で決して所有していないものを求めるものがあり、それは或る前兆やその種の事物のために港に帰ることでもある。どんな冒険においても全員が堕落させられると決して思わないし、更にもっと稀有なことであるが全員が救助されると決して思わない漁師は従って何処にいるのか、そして人間は従って何処にいるのか。この人間は、世界が存在していることを知っているのだろうか」

《存在論的》　私は尋ねました、「しかし私たちは一種の存在論的証明へ良く導かなかったのではないでしょうか。何故なら、悟性に従って本質を考えるなら、そして同じくもし私が敢えて言うとすれば、本質の中の本質である純粋な本質は、測定され数えられ証明された存在の法則そのものであると、私たちは決して言わなかったからです。例えば一点の真理とは、どんな地点でも絶対的に一点そのものの外のものです。そして原子の真理とは、存在に至るものであり、絶対的に原子の外のものです」

《正確》　老人は答えました、「それ故に世界は正しく正確であるに違いなく、幾何学的にも正確である。そして、我々の最良の思想と常に一致して報いられるに違いないことは極めて危険である。しかし我々は再びそこに滑る様に進むのである。幾何学は正確でないが、不正確でもない。幾何学には最良と最悪の同一の書式がある。そして諸事物は決して幾何学に従っていないことを繰返し言おう。何故なら、幾何学に諸事物は何も存在しないし、それらを何も期待していないからである。反対に、それらの諸事物のあらゆる点や線や表面のどんなものでも、結び付いている条件から取り去るものとしてのどんな本質でも、否定しないからである。我々は常にそこで何も出来ない存在から、そこで何も出来ない存在へ戻されるので、世界が我々の幾何学にとって正しいとか正確であるとか準備されているという提案は、決して主題にならないのである。世界には属性としての媒体は無いのだ。そして、それがまさに世界である」

ルブランは再び言いました、「私が最も困難で重要と思われることは、恐らく公正な悟性の空虚と無関心を理解することです。　《幾何学》　幾何学が成功します。しかし幾何学を欠いても良い処から求める時は、何も見付かりません。それは網でしかなく、全てにとって正しく、全てを測定し、全てを把握します。それは何も規定しない数々の数字にとっては既にもっと明白です」

私は言いました、「力学が何も規定しないことを理解するのはもっと困難です」

老人は言いました、「これらの全ての学習は、我々を取り出して剥き出しにして終わりに見做す様に見える。幾何学的空虚を感じなかった者であるこの者は、恐らく我々が拘束される、いわば賭けを決して理解

することが出来ないのである。これは我々が望んでいる様なものだが、直ぐに全然我々が望む様なものではなくなるのだ。剥き出しの必然性である。　《小舟》　私が三角形において分かることは、事物の位置から起こることであり、少しも事物の性質から起こることではない。ここに一艘の小舟がある。船体と舵と帆柱と帆は波の様に走って砕くこれらの全ての事物は、善とか悪、有益とか有害としての思想に成り得るのだ。しかし、それは根拠の無い可能性でしかない。帆柱は私の頭を割る位に非常に重い。しかし、そんなことは位置が変化することによって起こるのだ。帆が申し分なく張っているなら良好である。余りに強力な破壊によって別の様相を呈すると、その人を溺死させることもあり得るのである」

ルブランは言いました、「特に驚くべきことは、泳ぎ手がひっくり返って帆の下に入ったなら亡くなって仕舞うと話していたのを、私は聞かなかったのでしょうか」

《クロムウウェル》　老人は答えました、「我々の生涯は位置が問題なのだ」

今度は私が言いました、「人々の奇妙な間違いです。何故なら間違いそのものによって事物が彼らには善とか悪とかになるかどうか知ることに、私は彼らの心配を何時も見るからです。そして、もしも善と見たなら、考えられるどんな偶像崇拝もそこに居座るのが見られるに違いありません。その代わりに色々な事物は私たちとそれらの事物との間の或る位置や運動によってしか善とか悪になりません。一枚の瓦でも人を殺すことが出来ますが、場所によっては善になり、道端の埃を気にせずに済みます。馬車はあなたを押し潰せますが、あなたから一メートル離れて通れば、全てが良好です。毒も壜の中にあれば、人間は死ぬことなく長く生き残れます。パスカルが言った様に、クロムウェル（６）を殺して歴史全体を変えた名高い砂粒は、単に場所が悪かったのです」

ルブランは付け加えて言いました、「もしも私が間違っていなかったなら、私たちはここで神秘の隠れた性質を手に入れます。敢えて思い切って言うとすれば、私たちはそれらの胸ぐらをみます。大変に単純な観念が大きくて美しい秘密の様に、私たちが何も行えないことがなければ、私たちに長い間懇願するのも奇妙なことではありません。私たちは何らかの神の傍を〈言葉〉として通り過ぎるのです」

老人は言いました、「〈神の言葉〉である。多分、唯一の神である。そうである。神秘の性質とは、限定された位置の外に取り憑かれた性質である」

ルブランは遮って言いました、「金は決して黄色くありません。もう一つの太陽として照らされたものであり、黒いに違いありません」

老人は答えました、「あなたがもし自分の道にいないとしても、人間は決して悪人ではないのだ。そして人間自身は立ってから眠るまでは、もう一人の人間なのだ」

《計画》　私は言いました、「そこから私が理解するのは、世界が存在することを知っている人々は余りに少ないことです。しかし、考えられる世界のための計画を立てて、つまり可能事を立てて、彼らが競争や戦争に基づいて出来ることを考えたり書いたりする諸存在の一人ひとりの原因を隠さないとするとしても、その時に彼らは何を証明するのでしょうか。というのも、存在に代わるものは何も無いからです。　《意外な出来事》　諸事物が小さかったり大きかったり、評価されたり無視されたり、既知であったり無知であったりして、全てが等しく重要なものであるこの現実的な均衡に代わるものも何も無いからです。私がそれに気付いたのは、々自分の世界が分かれることに気を付けている人物であり、彼は何でもなく、何もせず、位置は結果のものでないことを自分自身に自ら答えています。裏切られた愛、金銭的危機、戦争の脅威、これはどれも同じです。それ故に彼は自分の不幸を熟慮し、不幸を自分の上に吊して保留しますが、諸存在にはそれらがあるということを彼が考えるからです。それでは何時でしょうか。不幸が既に過ぎ去り、危機が解消し、彼の周りの大きな流れによって解決される瞬間そのものの時です。そして、々もう一つの不幸が背後から近づいても、彼は決して見ません。その様な偉大な政治家は、彼が創ったヨーロッパというものを詳しく調べて、虚しくして解答を待ち、風邪で死ぬのです」

老人は言いました、「それらは悲劇と反対のものである。その観念をしっかりんで、上手に握ろう。意外な出来事を余り恐れないことだ。それを愛さなければならない。　《予言者たち》　この世界で不実なものは何も無い。風邪は、我々を待ち伏せる一種の存在ではない。あそこを航海するあの人物は、舵を取って滑って行き、それから突風を避けるのである。既に大きな帆は戦って働いているので、彼が行うのは彼を助ける動きのために手の重さを付け加えるだけである。救済が手元にあるのは危機的な瞬間である。人生の最も重要な秘密は、我々の全ての予想が誤りであることだ。狂った政治家は、予告して行動する者である。何故なら彼は予告されたからであっても、場違いなのである。勿論、予告されていたのではない。世界が我々を導く処を同時に認識して感じることである。そこへ行くことであるが、全く行くことはない。絶えず人間と世界の通路を創ることである。我々は予言者たちを余り笑わなかった。描かれた運命が好きであり、我々に寺院や神々がそのイマージュを提供しているのである」

ルブランが遮りました。彼は言いました、「私は軍人たちに知り合いが多いので、彼らのことを話すのが好きです。彼らは占領されていない陣地を包囲して、粉砕するための時間をつぶします。そして、そのことを彼らに言う人々は決して好きではありません。反対に偉人たちは、思い描くことを信用しないで、その人物に相応しく殆ど名状し難い状況に止まって、少しも予想しなかったことを待ちます。面白いのは、彼らが宿命論者であると言われることであり、彼らも自分自身を宿命論者であると言っていることです。反対に、運命はまるでその人の内属が考えられるものではなかった様に、原因がどんなであろうと常に実現されたものの様です」

《無限》　老人は付け加えて言いました、「そして、この不可能な事柄によって悟性が解体させるのはその不変の思想であり、出来事を終えることであり、そして世界に限度を設けることであって、まさしく観念である。そして我々が言って来た様に、幾何学者は絶対的外部に向けてアンテナを張ることしか行わず、外部によって自分自身を動かして形作るのである。そうなのだ。真の幾何学者にとって起こることは、神に味方する時、計算出来る世界には決して起こらないのだ。反対にドアは何時も開かれていて、その観点では他のものに従わないし、他のものもどうだか分からない世界に向かって開かれているのである。以上は慣例通りの方法しかないことを理解するために準備されているものである。　《純粋精神》　幾何学者の思想には物体が無く、出来事を変形させずに受入れ、彼が自分自身の裡で確信することを最良の透明さを通ってやがて自由へ移るのである。純粋な内容の純粋な精神へ移るのである」

私はここで注目すべきものでしかなかったことや、長い沈黙と事物への視線で遮断された短い独白でしかなかったことを、急を要する話の中に集めます。太陽は木々の尖端の背後に滑り込みました。上弦の月が既に海水の縁を照らしていました。それなのに広い海は、決して自らの色彩を持っていなかったことを十分に示していました。　《詩人たち》　それ故に申し分の無いその外観の中で、私たちは海から形作ったあらゆる思想を絶えず有効に消したのであり、無駄ではなかったのです。人々は説明し難いどんな愛も愛していますし、その性質は観念を拒むものです。人々は何も約束していないものに、良く自分たちの希望の的にしたいに違いありません。それらの人間の目は、この拒絶によって美しくなります。しかし誰が愛することを知っているのでしょうか。従ってこの世界に戻って来て、周りが日に暮れかかって来ると、私たちは詩人たちや不確かなこの旅に満足しましたが、気に入っているのはこの世界の唯一の事物です。（完）

（1）イフィゲネイアは、ギリシア神話のミュケナイ王アガメムノンの娘で、女神アルテミスの怒りを静めるために父の命で人身御供になるが、女神が彼女を救う。
（2）バークレー（一六八三～一七五三）は、アイルランドの神学者・哲学者で、世界は「意味深い関係による体系」としていて、人間の精神を共にする神を創造の源泉としている。
（3）水成論者は、全ての岩石は水に沈殿して出来たとする。

(4) アムラン（一八五六〜一九〇七）は、哲学者でヘーゲルの哲学をフランスに導入した。
(5) ザディーグは、ヴォルテール（一六九四〜一七七八）の小説『ザディーグ』の主人公で、古代バビロニアの公平で正直な青年であるが裏目に出て翻弄される。
(6) クロムウェル（一五九九〜一六五八）は、ユゴー（一八〇二〜八五）の三千行に及ぶ韻文劇『クロムウェル』（一八二七）における共和主義者であるが、王冠への執着が描かれた。

第八の対話

もうすぐ秋分の日です。嵐が背景をかき混ぜていました。人々は収穫した海藻を大きな熊手で放りながら集めています。これらのことは、ここにシーザー軍が上陸した時代から変わることがありませんでした。私たちの思想も長く続いた研究に沿って広がりました。そして、それは結局のところ悟性が人間に残っていることを十分に調べるために、私たちには非常に良く準備されていました。南西の風が雲の切れ端を運び去りました。　《鉛筆》　決して絵を描く時ではありませんでした。芸術家の鉛筆は、踊り手の様な動きをする幾人かの人々を単に定めたかったのであり、それらの動きによって人々は海流から離れて征服をむ助けになっていました。ルブランは、長い間ぼんやりとしていた後で自分の家に帰った人物に似ているこれらの事物を見詰めていましたが、その人物は人間と牛と馬たちの仕事を一緒に判断します。ルブランは言いました、「従順には打ち勝つこと、それは偉大な言葉です。全てはここに課せられます。最小の行為でも波を追います。目は隙を窺い、身体は一瞬に狭い通路から滑り込みます。　《海藻》　時々若い人は海藻を採るのに失敗します。余計な一歩で危険に晒して流されます。道具そのものには事物の形状と角度があります。熊手の傾いた歯を設計したのは浜辺そのものです。人々は、波や海藻や雲の様に風に対して身体を揺り動かします。全てが自然です」

私は反論しました、「しかし、全ては発明されたのです。人間の形は、渦巻に止まらせた儘にして逃げ出して、自分自身を役に立てられるものに順応します。その道具は事物のものと同様に人間のものでもあり、斜めの投擲や背後の動きについて正確に測定されていて、征服を確信します。そして山積みにされた海藻そのものは、熊手のために準備されているのです。浜辺が無人になると、砂に付いた素足と同じ位明瞭に、人が通り過ぎたばかりであることが言われるに違いありません」

《デッサン》　画家はその間に両目と手で、生き生きとした絵様帯を追いました。彼は迅速に一寸した動作で描きました。画家の手によって他の絵様帯には五人の人物も描かれました。人間の形状を持ったそれらの仕事は、手の形状も描きました。それらの線も又流れていました。

画家は言いました、「線が正確なのは素晴らしいことだ。線だけでも良い。線は全てを語っている。線が囲む紙の空白部分は、直ぐに壺の様に埋められる。けれども線は決して存在しないのだ」

私は遮って言いました、「線は行為の痕跡そのものであり、それらの一様な山積みよりも更にもっと明瞭です。剥き出しの行為であり、予め考えられた規則があり、目的と方法を含んでいるものです。人間のものであることをこれ以上良く表現するものは何もありません。ここで画家は打ち破られます。絵具を塗った人間は人物を拒みます。絵具を塗った人間は自然以外の何ものでもありません」

老人は答えました、「人物画の後で我々が未だやり続けなければならないのは、それ故に人物のデッサンである」

ルブランは言いました、「剥き出しの対象を私たちに示しているのと同じ悟性は、充足し得るのでしょうか。私が予想するのは、幾何学者の視線に基づいて人物は何時も事物にも対象にもなるでしょうし、逆流と渦巻の間で単なる逆流にも渦巻にもなるでしょう。エネルギーの中心や結び目であり、爆発であり、一瞬の太陽です」

《自由思想家》　私は言いました、「今度は私が言う番ですから言いますが、多分そうではありません。私は昨晩、純粋悟性の詩人である古代ローマのルクレテイウスを読みました。人物は一人もおりません。その詩人は人物を忘れていましたし、その代わりに別のものに到達していました。勿論、人物は少しもいないのですから、人物がそこで歪曲されることも決してありません。読者になった後なのではっきりと分

かりますが、私は如何なる間違いも無く自由思想家を実感しています。何故なら、その原子理論を自然が少しも支えられないことは余りに明白であるからです。原子の集大成は、原子の如何なるものでもありません。二つの原子の単なる出会いは、一方のものではないし、他方のものでもないのです。従って完全なこの詩については如何なる間違いも無く、人物から噴出された影を見ている様に私には思えました」

老人は言いました、「事物は人物を拒む。しかし人物も同じこの動きによって事物を拒み、そして考える能力を見出すのである。幾何学も又、幾何学者を証明する。何故なら、証拠に服従させられる者にとっての証拠はもう無いからだ」

ルブランは言いました、「あゝ、あゝ、それは私たちにとって余りに強烈です。　《形而上学》　どうか落ち着いて下さい、先生。一度ならず私が信じる処では、形而上学の堅固な狭い大地が私には見えますが、如何なる大きさもないのです。何度も失敗した精神の純粋な王座です。デカルトは言いましたが、人間は人間であることを人生に一度確認しなければなりません」

ミューズは遮って言いました、「彼は神のことを言ったのです」

老人は指を上げて発言を求めました。彼は言いました、「神のことを言ったのは、もっと後である。偽りの神々は沢山いる。　《偶像たち》　人はそれしか見ないのだ。ここの大地は我々の背後や至る所が、数々の寺院と偶像で覆い尽くされている。それも又、乗り越えなければならない。そして、どんな力も打ち破らなければならない。それが最初の仕事であるが、私はそれが一つだけであることを疑っている」

ルブランが遮って言いました、「純粋精神のためには、純粋精神に戻りましょう。私にはそれが見えると思いました。しかし、あゝ先生は、もしも人々が証拠に従ったなら、最早証拠は無いとどうして言えるのですか」

老人は少しの間、夢想してから次にこれらの観点から答えました、「質問しないで単に証拠を理解しなさい。証拠は避けられないものであり、強制するものであり、結び付けるものである。どうしようもないものであるのが証拠である。倒されることなく考えられないのが証拠である。証拠は眩暈であり、陥穽である。　《計算機》　あるいは換言すれば、単に小学生の足し算の様に既に行われたものや提示されたものの合計である。それは機械ではなく、この世のものでもないのだろうか」

ルブランは言いました、「全く力があって奇妙なものです。人間の行為ですが、対象は人間です。かくして計算機が数えることになりますが、決してその上更に数えることではないのです」

私は遮って言いました、「計算機が一つの数字も創れないし、歯車の連絡が無ければ数々の装置が結び付かないことを人々が理解するなら、人々は多くのことを知るし、恐らく全てを知ります。それが数える時に聞いて下さい。私には、もう一匹、もう一匹と、何も知らない羊飼いが羊を数えるのと同じです」

老人は言いました、「一つの証拠から他の証拠へ流れる唯一の事例を考える方が良い。数々の証拠は今の処、我々の敵であるとさえ私は言うだろう。数々の証拠の中から一つの証拠を探すのは、今ではまさにとんでもないことであるのを我々は理解出来るし、そうでなければならず、決して数々の証拠の中に一つの証拠は無いのである。しかし注意して欲しい。全てを疑うことは思想ではない。というのも、全てとは何であろうか、悟性には対象が無くて本当は弁証法的な思想を拒むからだ。疑うことは、証拠を拒んでやり直す様に対象を拒んでやり直すことでもある。我々は言い過ぎただろうか。いや、全く言い過ぎることはないだろう。結局のところ、この拒絶という点に関して我々はその儘で世界を知るのである。そして我々は、報酬もその儘見える様に見るのである。というのも、全てが我々を騙すのは本当であるからだ。意味、内属、存在、原因、法則、全てが我々を騙すのだ。　《信仰》　しかし、それはベッドの中の様に信仰の中に我々を寝かせる間違いによる様に騙すのである。そして、重力が金の中にあると信じることや、証拠が証拠の中にあると信じることも、同じ間違いである。私が今理解していることとは、人が決して疑わないものは確信することも出来ないということである。幾何学はその事例の一つであり、迷って適用すること

以外に確信が得られないのが幾何学である」

ルブランは言いました、「幾何学の初心者たちは疑うことを知らなかったので、々証明に失敗したのを私は見ました。本当の直線は恐らく直線を疑うことにしかありません」

老人は言いました、「芸術家が仕事を止める様にして自由な精神は現れるが、道具で慎重に活動することによって直ぐに消えて仕舞う。しかし彼はちょっと見るだけで十分である。力学の世界は人間を仕舞い込み、決して消さないのだ」

私は付け加えて言いました、「あらゆる種類の弁証法的証明に対して常に毅然としている様に見える考察に、私は更に恩寵を求めます。毅然さによって自由になれません。あるいは換言すれば、自由になるためにはそれを望まなければなりません」

ルブランは言いました、「そうです。自由は、自由そのものを選択されているかどうかでしか選択出来ません」

《選択》　老人はルブランの話す身振りを止めました、「選択するのだろうか。征服者たちは選択したのだろうか。選択は決して一方と他方ではなくて、寧ろ望むか望まないかである。というのも、その選択は自然のものであり、我々は巻込まれるからだ」

ルブランは言いました、「自然の選択は決して選択になりません。沢山の空疎な分析と、私たちの大変に困難な可能事を判断するために、ここで元に戻りましょう」

私は付け加えて言いました、「協議する者と決定する者がおりますが、前者はこの世界で何も行いません。行動することとは別種になります。というのも全ては開始されますし、世界は待ってくれないからです」

《道具》　老人は言いました、「波は待ってくれなかったのだ。我々は恩知らずである。人間の強さも思考することさえも仕事と道具との長い連続を忘れたなら、思い切って如何に描写するのであろうか。この熊手は作られたのである。この柵も作られたのだ。発明品が木の節々で既に輝いているのだ。自動車、馬、麦畑、道路、家、工場、港そしてそれらの事物の保安まで、通り道を作るために舵を取るのである。それはどんなものでも、新米がびっくりする仕事と道具であり、その人がこれらの現実と力強い思想の全てを自分の行為で最先端に生き返らせることに責任を持っているのである」

私は言いました、「二つの支えです。それ故に仕事にはこの世界と道具の二つの支えがあります」

老人は付け加えて言いました、「それから恐らく、無能と能力の二つを我々に分からせるのは少なくとも仕事である。悟性だけによって我々は論理家に勝つものであることに注目しなさい。何故なら、遠慮してドアを引っ掻く奔放さに代わって、閉じられた世界の中で入口を探すことは決して重要ではないからだ」

ルブランは言いました、「世界は決して閉じられていません」

私は付け加えて言いました、「そして、人間は世界におります。　《ユリシーズ》　自ら道を空けるべきではありません。彼はそこにいるのであり、そこで泳いでいます。全員がそこから泳ぐ時、ユリシーズは返し波の音を聞き、そして波を概観しました。死体は既に海水を割っていました。一つの軍団になって突撃の権利を持つことは、権力者の最初です。そして、私たちの手段は全てが活動の中にあり、更に仕事のためにあります。しかし、これらの孤立した思想家の分析は何と弱いことでしょう。目的も手段も動機も弱い観念も、全てが釣り合っている閉じられた壺です」

《未完成》　老人は再び言いました、「世界は決して閉じられていない。そして、存在という概念のものによって我々を何時も他のものに差し向けるので、明白なのは私が充足するものとしてそれをこれから考察しようとしたその時に、そしてどんな未来もその中に再び閉じ込めるその時に、未開人の見方を立て直すことが出来ることである。その反対にあらゆる部分とぶつかり合う原子として存在するとか、あるいは周りの圧力や落ち込みによってどんな意味においても直ぐに限度が裂ける体系として存在するのがどんなであろうと、この世界を理解することが出来ることは明白である。それから次のものも良く考えてくれ。そ

れは私をそこへ導く実在する人間の概念そのものであり、何も無い無能な想像力ではないのだ。世界がどんなものであろうと、それは少なくとも彼ではなく、未だ別のものである。世界は決してこれでもあれでもない。完成していないのだ。終了していないのだ。どんなものでも存在するものは、大きくても小さくても、存在が絶対的に外部のものであり、あるいは人間は絶対的に不十分なものであるというそのものから成っているのである。概念そのものによって存在するものとは、常に我々の表象の周りや数々の限界を超えた空間として、限界の概念そのものによって存在を外れているのだ。ところが、悟性の位置は常に対象の周りを見詰めていても、どれ程の周りか分からないから十分に注意しよう」

老人は黙ったので、ルブランが考えを口に出しました。彼は言いました、「絶対的な存在を探究するのが不条理であることを私は良く分かります。私はそれを終わりにしたいし、それで十分です。しかし直ぐに、そのことだけで最早一つの観念だけになります」

《矛盾》　私は付け加えて言いました、「もしも私が間違っていないなら、私たちは何らかの誇りの核心を移動させます。何故なら、有名な矛盾に倣って正反対のものは悟性のもので（限度の後でもっと空間の後で、原因の前でもっと原因の前で、状況の周りで、もっと状況の周りで)、正反対のものが正反対のものでしかなく、それは満足させられず、無知の中に精神を残して未解決の儘にして祖先がなければ人は生むことが出来ない様になると認められるからです。その反対に、高慢な主張は全てが完成されていて、何らかの事物が存在しているので大変に強く、私は無敵になる日まで主張を自分のものにするので、その主張は唯一の存在理由を与えて最後にはその存在を正当化します。しかし今、私の目は見開いていて、その様にして正当化されているものを理解しますが、満足しながらも目

を閉じると、存在するものにはなり得ません。私はこの道によって、私たちが存在に不足する理由を理解します。そして、それは私たちが探している存在ではありませんが、本質であると理解します。私は有名な論証を再び始めて、そして私たちが自分たちのお金の場所を変えてみても、存在理由は決して存在に近づきませんから無駄であると私は思います。　《カント》　私は再び始めると言いましたが、間違って言ったのです。というのも実の処、何かによってどんな存在論的証拠もその根本において切り離される、この驚くべき批判を私はついに理解するだけであるからです。存在は、理性の働きから生むことが出来ません。私たちの精神の縁は波が打ち寄せており、それは経験そのものの他の手段によって与えられ受入れることしか出来ないのです。そしてカントもそのことを簡単ですが、はっきりと言っていました。巨匠を超えたいと思った衝動をお許し下さい。しかしながら私は数多くの経験からそのことを知っています。巨匠を超えることは限度の外ではなくて、その思想の内にあることです。そして修養することで最良の人になると私は言いませんが、別人になります。誰にでも、より一層相応しい人になります」

老人は再び言いました、「かくして、まさにかくして我々はユークリッドを超えようと試みたのである。彼の後にいるのであって、前にいるのではない。これらの全ての考察は我々の道を明らかにしているのだ。

《限度》　今は、自説を曲げずに不十分な状況の上ではなく、限度の中で忙しいどんな存在に関しても不十分そのものの上で、我々はレキエ（１）の有名な頁の中で大変に剥き出しで強力な数多い議論と幽霊を何度も打ち破ることが出来るのである。過去の或る瞬間に忙しかったこの世界や渦巻くガスや星雲とかは、お望みならそれらは同じであり、悟性の法則そのものによって絶対的に同じになるだろう。　《ウェルギリウス》　そして悟性は全ての分子とか原子を知っているだろうし、その瞬間に悟性の活動も知るに違いなく、サラエボの暗殺を予測することが出来たのである。そして、飛行機のパイロットの頭を吹き飛ばした砲弾は、永遠の対戦であり、永遠の死であり、マルケルス（２）のものと同じである。

ウェルギリウスの眺望には何か恐ろしいものがあり、全てが絶望の詩です。誕生の前に、既に葬儀があ

る。明確な形を与えられたこの世界と、全てが調整されて創られるスピノザの学説をやむを得ず壊さなければならない。何故なら、そうでなければならないからだ。それは、上辺では悟性を侮辱することである。しかし、それは我々がそのことを知っているし、私もそのことを今では知っていることである。それは世界を閉鎖することよりも悟性を見捨てることである。この間違いは行われたが、崇高な堂々とした間違いではなかった。私たちは何かの時に自分自身に対して自分が自由であることを望むが、それは恥ずべき間違いである。私は、恥ずかしいために間違いであると言うが、厳格な外観に従っても、急いで厳格に思考しないことである。そして、言葉遣いのあらゆる意味においても、人が言っていることが少しも分からないことがある。それは社会の流行であり、礼儀正しさでもある。それは武器と知識で、国家理由を通して仕舞う成上がり者の慎重さでもある」

《脱走兵たち》　ルブランは遮って言いました、「脱走兵たちです。私は脱走兵たちの微笑を良く知っていましたが、本当にフォア・グラとか若鶏料理のタンバルに順応させます」

老人は言いました、「中断しよう。議論を中断しよう。この広大な海が我々の卑怯な振舞を洗っているではないか。一瞬の世界は世界そのものに等しく、世界の上に閉鎖され、発展するものを何でも含んでいる。それが世界であり、我々はその世界に存在を結び付けることが出来ないし、存在は世界に接触することもない。そのことは我々が思考することを知っていても不可能である。それは三角形の様に閉じられた壺でしかない。実際に三角形が閉じ込めるものはどんなものでも、そこでは既に中味になっているのだ。しかし我々はより良く見詰めた。三角形という内部のものは決して無い。そこでは全てが外部のものである。存在の通知書や、中味を探す経験と同じである。我々の世界に戻ろう。そこでは予め創られているものは何も無いし、予想されているものも何も無く、各瞬間が新しいのだ」

《未来》　私は付け加えて言いました、「その様にして、時間にはその固有の中味があり、最早永遠に失われないのです。何故なら、未来は既に創られますが、それは未来でなくなります。そして何も起こらないに違いありません」

ルグランは言いました、「そして、外部の豊穣さというものによって絶えず新しい何かが起こります。そして宿命論は消えました。私はそのことを十分に分かっています。しかし人間は未だそこから自由ではありません。存在している身体は、身体の状態次第です。決して自己によるのではありません。身体は忍従します。外部から全てを受入れますし、自分の行為さえも受入れ、忘れられた大砲の回りをよじ登っていた昨日の昼顔と同じです」

老人は言いました、「いずれにせよ人間は、自分自身の信仰を助けて自分自身に逃げ出すのである。我々は排除したり飾ったり作ったり整備することを止めないし、管理することも決して止めないのである。そして人間の状況は、人間が広大な海において揺さぶられる全ての部分の最も近くに滑り込む瞬間そのものよりも、多くの自由を決して自分に感じない様なものである。反対に自分の計画や思想に引き下がる人間は、その時に世界の重圧を感じて、変わることの出来ないものに期待しているのだ。最早、世界の外には戻れないのだ。私は有名な言葉を借りて、人間は自分の持ち場で自由になるのであると言いたい。助けたり助けられたりする蓄積と道具による変わることのない、人間の仕事のこの連鎖という一点に私は期待するのだ。　《ベーコン》　服従と同時に逸れることが出来ない、まさに有名な言葉であるベーコンの言葉に従って結局のところ勝利を述べることになるが、恐らくすっかり明らかにされることは出来ないのだ。《船乗り》　観客は待つ。その様な姿勢は宿命論者である。しかし、操縦者は譲歩しながらも決して管理することを中断しないし、彼が行うかも知れない間違いの全ては瞬間的に観客の立場に連れ戻すが、決して命を奪う旋風の働きに従わないこととなったのだ。彼は近づき過ぎて決して従わなかったのだと私は思う。波を乗り切ることが重要であり、波そのものの上で直ぐに折れ合うことが重要である。かくしてこの人はそこを航海することになるのだ。　《宿命論》　そして、船首の向きを変える時間が間に合わなかったな

ら、その時は行きたい処へ行くのを止めることだ。ところが、勇敢なこの信念は、宿命論者の考えによって騙されるばかりである。それからあなた方は罠だと分かるのである。ここではどんな人間も形而上学者であり、巧みに自らを救わなければならないにしろ、注意を運命に向けて死ななければならないにしろ、全ては書かれていたり言われたりして、既に行われているのだと思うだろう。古代から繰返し言われて来ているのに、何故医者を探すのだろうか。何故なら、もしも私が医者の間違いで死ぬことが書かれているなら、私は探しに行くことはないからだ。そして、もしも私が医者によって生きることが書かれているなら、私は医者の処へ行くだろう。この理屈は茫然とさせる。しかし医者や薬を求めるとか、他の例を言うと旋風や波に応じて最良のものに適応させることは、まさしく自己からこの理性の働き、つまり致命的な理性の働きに衝撃を与えることである。我々はそれに我々から衝撃を与えたのだ。望むこととは、物事の決着が付いていると決して思わないことである。望むこととは、その機会をむことである。それはしかも機会がたった一回だけではないことを知ることであり、意志によって機会にするだけである。私は、行わずして望むことが何であるのか分からないので、何時も行為に期待する。以上は、悟性が我々を整える健全な思想である。ところが私が分からないのは人が今でも求めているものである」

私は言いました、「このもう一つの思想のために全てが行われて達するのは、何のためであるのかが求められます。それは遅過ぎます。何時も遅過ぎるのは多分、宿命論者の思想です。少なくとも弁証法ではなく、拡散する一種の恐怖によって知覚されて明らかにされた思想です。かくして人間は落下しますが、その思想は落下より遅いのです」

老人は言いました、「その点に関してもっと良く私が言えるのは次のことである。手の施しようが無い遅れという観念そのものによって、誰が遅れなかったのであろうか。それらは時間にゆとりがあるのだ。絶え間ない変化という観念によって、行わなければならなかったことや行わなかったことについて、背後への最小の視線も閉じられたドアの前に我々を移しても何も言われないからもう一つのドアが開いているのであるが、人は決してそのことを理解しないのだ。再び閉じられて、あらゆる事物の変化によっても直ぐに閉じられるのだ。　《救助者たち》　軍人の様な政治家はこの感情を知っていて、まさに々話を進展させるが、火事を消す消防士たちやあらゆる種類の救助者たちを感嘆して見てくれ。実際に私は最近も、救助をしている彼らを見ているが、彼らの行動そのものには最早可能でないことも忘れさせる最も美しい人間の行為がある。行為が、労働でも職業でもないもののためにある人は、この密接な通路を超えることが出来ないのだ。　《職業》　ところで、真の銀行家も又危機の時は職業という確信によって未来との瀬戸際にいるのである。素人と呼ぶべき他の人は、致命的な観念によって死んで仕舞う」

私は、何故理解しなかったのでしょうか。「そうでなければならなかったに違いないのです。遅すぎたのです。道具はその時、何時も想像力上の一点に赴き、取り返しが付かないことに対して消耗します。それは既に作られている未来を作り直したいのです。そして以上は恐らく、宿命論者の思想が何ものかに耐えると信じている何らかの対象です。それは作り直されたり熟視された記憶ではなくて、網膜に映されたものの様な直接的な記憶です。フェンシングの名人が言う様に、防御に基づいて攻撃することです。正確に突くのはプロの専門家以外におりません」

《行動すること》　ルブランは指摘しました、「真実の小説において熱狂者は、最早存在しない状況について常に熟考していることを私は理解しました。如何にしてそこから抜け出るのでしょうか。彼は独り言を言います。彼はそこから出されますが、そのことを知りません。新しい世界は絶えず生まれますし、小説の主人公は船首の監視兵の様に前方へ常に視線を申し分無く投げつけることが出来ません」

私は言いました、「それは小説的なものを明示しています。しかし、小説は理性的な熟考や有効な行為を述べながら、それを良く忘れます。そして最早冷静なものは何もありません。何故なら冒険は私たちの思想に基づいて、常に少し前もって見張るものであるからです。時間は働きを導かなければなりませんし、人

間は従って行かなければなりません。年季奉公です」

老人は言いました、「思想の中で行動する者は素晴らしい。何をすることが出来るのであろうか。抵抗力と変化という二重の支えを自分の前に少しも発見しない時には、如何にしてそれらが出来るのであろうか」老人は少し考えた後で、付け加えて言いました、「しかし、もしも熟考が情熱の薬にならなかったなら、何ものでもなくなる。そして思考することとは職業ではない。悟性は色々な問題を解くと同時に、それらの問題を提起するものでもある。勿論、我慢のならない情熱を耐え忍ばなかった者は、誤りの本当の姿も決して分からないだろう。慣習は悪しき道である。そして、ヒュームが確かに余りに尊敬されている蓄積による、これらの全ての冷静な分析は全に人間の脇にある。人間はやり直しに縛り付けないし、自らのやり直しにも縛り付けないのだ。反対に、世界は絶えずやり直しで釣り合わせているし、方向を逸らせてもいる。我々はこれらの水浴びをする人々を見たし、思い出しもした。それは野生の人々であり、日向で裸になっているか、鼠海豚の様に水中で遊んでいた。そこで誰が局長とか法学者とか商人を見分けられただろうか」

《歩兵たち》　ルブランは付け加えて言いました、「そして、泥だらけの歩兵たちの中でも測量士とかネクタイの商人を、誰が見分けられたでしょうか。それはシーザーの外人部隊の兵士たちであったり、重い荷物を背負っていたり、隊長たちの誰かの殺戮を考えていたりしていました。でも、少しばかりの葡萄酒で彼らを思い止まらせました」

私は言いました、「慣習の本当の顔は、狂信とか深く誓った慣習であると私は信じるかも知れません。怒らせたり苛立たせたりした慣習です。自然は慣習を取り除くので、苛立たせるのです。人は集団の出身ではあり得ません。でも、以上が集団の出身になる理由でもあります。この一年間は私にとっては口論の一年間でした。私は微笑する顔も一人ならず見ましたし、更に喧嘩の最中に突然に結ばれる友情も一人ならず見ました。　《悪人》　これからは殆どが許されないことですし、人間は悪人になるのを誓うのです。その様なものであり、悪意あるものですが、それも又信念であり、その様にして人はそれを愛することも出来ます」

老人は、深く誓った青年の様に素早く勢い良く私の言うのを遮りました。老人は言いました、「それを愛さなければならない。彼は人格を憤慨する。そこから開始するのである。彼には物事に抵抗することとか、適さない絆を告白する慣習はないのだ。寧ろ、私は彼が侮辱された悲劇俳優であると理解する。そうである、その時は金の重さを量り、指先にその重さを感じているのである。単に指の中だけでなく、心や髪や足裏まで感じているのである。　《ヘラクレス》　少なくともそれらは思考の無い情熱である。かくしてヘラクレスは愛を感じたのであり、逃れられなかったのだ。あゝ、震える人間の心よ。しかし、金よりも価値のあるこの言葉を言った者は解放され、そして解放する一人の詩人であった。狂信者とは、くしゃみが全霊を支配すると書く人間である。何故なら、ドアが叩かれると一瞬にして考えられるどんな恐怖も感受され、結局はどんな知覚も拡散する憤慨でしかないと理解するだけかも知れないのだ。そしてそこから、従ってどんな精神にもなりたくて、全ての身体でもある生命から望んでもいないことまで憤慨するのはそこからである」

私は言いました、「私が自由についての全ての議論の中で観察したのは、その源泉を発見し始めた否定するための激昂です。そして理性と呼ばれているものは、まさにヘラクレスの様な崇高さでしかあり得ないでしょう。それが今では神々の戦闘になっています。私たちの味方になるにしろ敵になるにしろ、神々は『イリアス』やトロイ近くを流れるスマンドル河の様に走り回り、アキレスの足に絡みつきます。考える能力のある旋風たちです」

老人は再び言いました、「踊る旋風たちだ。見なさい、この大きな海は何も考えないし何も望まない。海のヴィーナスは海水の帯でしかなく、絶えず結ばれては解かれている。

《両手》　車輪の様に下方で回転する鼠海豚は飾りの多い形状を持ち続けている。そして精神は、沢山の

鼠海豚とその他の形状と神々を彫刻するための時間を見付けた自己を疑うに違いない。しかし、最新の狂気は恐らく思想によって両手を動かすのを望むことである。空から大地へ跳ぶ思想と両手よ。如何にして結び合わせるのであろうか。勿論、部分を部分に結び合わせる様に、全体から部分へ全体を結び合わせることは出来ないのだ。賢明な悟性はここで既に拒絶によって我々を救っている。行動しながら思考することであり、両手で行う儘にさせて置くことである」

私は付け加えて言いました、「人間は開始されることでしか変わらない、と言うに帰します。思想によって開始したいとは、何時も消え失せる何という奇妙な努力なのだろう」

ルブランは言いました、「それは跳躍を説明する様に跳躍したいことなのです。しかし二回も三回も人は跳躍しません」

《アキレス》　老人は言いました、「同様に二回も三回も直線を思考しないのであろうか。我々がもう一回アキレスのことを言う様になっても、私はゼノンのことを言うのである。アキレスは亀を追い抜くが、悟性も又追い抜く。間違った混合でしかなく、何でも終わることで始まる対象であっても、分割出来ない跳躍を止めるこの間違った混合しかないのである。そして、精神と肉体を決して分離させずに我々を一方に、他方と同じに決して委ねないことによって我々は倒れるのだ。何でも思考する人間にとってデカルトは断絶をやり直し、そして剥き出しの希望の周りにどんな人間も集めるのである」

《美》　夕暮れの美とは何の意味があるのでしょうか。もしも夕暮れが私たちの救済の場でなかったなら、変わり行くこの世界は何の意味があるのでしょうか。私たちは夕暮れを愛し得るのでしょうか。紫色に飾られた灰色の空は、虹色に眠っていた海の上に広がりました。靄の立ちこめた遠くの岬は長く伸びていました。目に見えない太陽が砂丘からくっきり浮かび上がりました。秋分が協定を結び直しました。どんな協定でしょうか。人目に付かない親切な神との協定ではなくて、祈りには耳を貸さないで両手には忠実な自然の内にある外観そのものである、自身のことには純粋に無知な自然との協定です。私たちが引き返した時、灯台に火が入り、光による叫びを発していました。（完）

(1) レキエ（一八一四～一八六二）は、哲学者で新批判哲学のフランスの先駆者である。人間の自由の問題は深いキリスト教的な関心に応えるものであり、『第一真理の研究』（一八六五）を著した。
(2) マルケルス（前二六八～前二〇八）は、古代ローマの将軍で第二ポエニ戦争でハンニバルを悩ませ、シラクサを攻め落とし、「ローマの剣」と讃えられた。

第九の対話

《日曜日》　コートを着る時間です。帰宅する時間でもあります。私が〈創造の浜辺〉と命名した無人の長くて大きな浜辺を今、私たちは白っぽい太陽の下を歩いています。何故でしょうか。何故なら、白砂の長い浜辺が押し返すその上で波は転がり、その浜辺は嘗て大河であった小さな流れを遮り、風と痩せた芝の助けもあって、停止した儘の波動のあるこの大砂丘を創っているからです。ここでは波が絶えず自らに似せた不動の大地も創っていて、その上に人々は家や大変に雄弁な小さな教会も建てました。日曜日です。数々の物事が決して変わらない日です。

私は言いました、「ここには牧場を示しながら突然に狂気の雌牛となったイオ（1）がおりますが、その理由を人々は知りません。尾はピンと張り詰めていますが、よろめきながらも走ろうとしています。幾らかの蠅に食われていますし、少なくとも仕事に疲れてぐったりしています」

老人は言いました、「それから鎖に繋がれた例のプロメテウスは失った自由のイマージュを見詰めているのである。しかし彼は大きな帽子を被って通って行くのだ。ミサへ行くのである。彼は、決してミサへ行かない人々を大変上手に一発で倒すのである」

《ジュピター》　ルブランは付け加えて言いました、「それ故に、そこの畑には平和があります。海上や岬の周りのここには力があります。そして、ここでは何千年もの間に名前を変えて来たが、政治の神であるジュピターの様な人物が支配しています」

ミューズは言いました、「あなた方は家のためには一人前にならないで下さい。人間の形成には、空疎なこの世界を大いに必要としています」

老人は言いました、「夕暮れの思想である。しかし、生き生きとした朝は我々により一層良い助言を与えてくれる」

ミューズは言いました、「葉はもう赤いし、四季の中では夕暮れですが、夕暮れは来るのでしょうか」

老人は答えました、「寒さが来るのである。それは思想の時間である」

私は言葉を継いで言いました、「いいえ、違います。私はこの恐ろしい順番を許さないでしょう。ここは選り抜かれた兵士たちの国で、彼らは戦車と一緒に行きました。神の恩寵のメッセージを繰返し言いに行く司教は、どんな服従でも祝福しました。もしも私が良く理解したなら、それは力のメッセージです。悪いニュースであり、イソップ物語が一般に売られて以来、数多く繰返し言われて来ました」

ミューズは言いました、「怒りは今でも力がありますわ。そして奴隷たちの戦いも又、一般的なことでした」

《イオ》　老人は言いました、「イオの雌牛が狂っているためか、足枷を付けて走り回っているのはより一層滑稽である。恐らく、言われる儘にロープで引かれるのを待つまでもなく命令に従う方が良いのだ。しかし我々の思想は苛立つ雀蜂の様にぶんぶん言っているのである」

私は言いました、「お許し下さい、ミューズよ。ロープを崇拝しない人々をお許し下さい」

ルブランは夢想していました、「私はロープを受入れます。喉を詰まらせて引っ張られることになるのも私には分かります。私は良き市民です。そういう人間になりたいのです。私は軍隊の施設付司祭の階級を表す金モールの本数を数えて敬礼します。これ以上の要求を誰がするのでしょうか。これ以上は要求されなかったのではないでしょうか」

《奴隷の愛》　老人が遮りました。彼は言いました、「神と呼ばれる人々はまさにそれ以上を要求している。何故なら、抵抗出来ないこの力は酷く恐ろしい名前で完成するからだ。そして厳しい政治家は愛され

る性質に混じり合い、主人を愛さなければならなくなり、彼に感謝の言葉を言わなければならなくなるのだ。何者かの手の中で自分を感じるのだ。愛は服従を良く飾らなければならないから、そこに真っ直ぐ行くのである」

私は言いました、「しかし、愛の秘密のロープは奴隷の愛を軽蔑します。それは自由で高潔で飼馴らされていない何かを望みます。誰も力によって愛しません。従って愛されるのは弱い者です」

ルブランは付け加えて言いました、「しかし酷く恐れてもいます。弱い者が持っている細いロープによって恐れているし、それは私たちが彼に与えたものですが、私たちの喉を締めるものでもあります。人間は何とかしてそこから切り抜けます。それは既に職業です。そこには決して唯一の動きも無いし、潮や渦や砂丘の様に自ら説明しない情熱の唯一の結果も無いのです。愛は推測と彫像と寺院を生みます。神は秘密ではありません」

《力》　老人は遮って言いました、「神は秘密ではない。しかし、神は作られるのだ。力や他の偉大さによって作られたものである。良く見てみると、全ての証拠は二つのものになる。又は、力から出発するものと、愛に値するものを証明するものである。あるいは全ての者が愛し尊敬し崇拝するものから出発するものであり、そして善が力を持っていることを証明するものである。事物から精神へ、あるいは精神から事物へ、そこには飛躍がある。そして合理的な理性はいずれにしてもパルメニデスによってはっきりとなったが、存在は一つであるという古代の証拠によって、我々に飛躍を行わせるのだ」

ルブランは言いました、「少なくとも何かを把握する悟性は、一つ一つの進め方において存在には両面があってこの立場で私たちを支えていて、そこから私たちのあらゆる思想を生んだり生み直したりしていることを繰返し言っています」

老人は付け加えて言いました、「それから我々に出来る限り正直に推し進めながら、我々は剥き出しの力を熟視して、そこから魂や好みや意志という最後には精神が自らの身に付けたどんなものでも引き出したのだ。　《禁欲主義者たち》　その代わりに全ての武器と共にこの精神は遭難から救われたのであり、我々はそれを誓ったので、まさに永遠なのだ。そして少なくとも精神は、禁欲主義者たちが望んだ様にどんな運命の中でも自分自身にとっての主人なのである」

私は言いました、「奇妙だが素晴らしい人々であり、常に彼ら自身を越えています。何故なら世界は神であるが、賢者は神々と同等の人であることも彼らは教えていたからです」

老人は付け加えて言いました、「余分なものは残して置いて、城砦の中心にある塔へ逃れることだった。しかし、決して逃れてはならないのだ。アルキメデスは最高の避難者であったが、それと知らずに禁欲主義者以上だった」

ルブランは言いました、「多分、彼はそのことを知っていました。私は美徳よりも有効な宗教上の注意力を真の幾何学の中で一回か二回、観察して知りました。ところでどんな人も、力を軽蔑するのは本当ではないでしょうか」

私は言いました、「怖がらせるものは決して美しくありません。美しいものは勇気ある心です」

老人は言いました、「それが勇気である。神になることが勇気である」

ルブランは結論を下しました、「神になる者は従って弱いのです。というのも、力のある者には決して勇気も無いからです」

《十字架》　老人は言いました、「この古い井戸の上に彫刻されている十字架は、有名な体刑を連想させないだろうか。人々は発見したのだ。彼らが考えていることを最早知らなければならないだけだ」

私は言いました、「そして、それを事物から精神へ呼び起こすためには祈ることです」

ルブランは付け加えて言いました、「ジュピターは通過されて追い越されます。どんな祈りにおいても通過されて追い越されます。しかし、それは少しも言われません。司教たちは肉欲の聖職者たちと同じです。

彼らは自分自身を教えることよりも、偉大な拒絶を覆い隠すことに専念します。そして、全ての説教が曖昧になります。何故なら、死ななければならないこと、服従して死ななければならないことを私は良く知っていますし、彼らはそのことを言い過ぎるからです。しかし精神のためには死んではならず、彼らがそのことを殆ど言わないことも私は良く知っています」

老人は言いました、「アルキメデスの従僕として仕えるために、彼らは精神のために自分自身で死ぬのである。あるいは中間の配置や卑しい協定は正義派が告白する処である。　《斜線》　しかし彼は他の人々からその結論が下されたのである。従って十字架は裏切られるが、それは我々全員によって裏切られるのだ。しかし、しるしは残り、そしてくっきりと示している。斜線の性質上の四つの等しい角度を見てくれ」

ルブランは言いました、「斜線は悪魔の様なものです。この神学は決して神に捧げられたものであることを止めませんでした。だから、それ故に信じなければならなかったのでしょうか」

老人は尋ねました、「何を信じるのであろうか。もしも人が信じているものだけしか知らないとするなら、信じることとは大地と事物だけでしかない」

私は再び言いました、「信じることですが、もしも私たちが自分たちを助けたいなら、世界が私たちを助けるだろうと信じることは禁止されます。信じないことであり、変わることです。反対に精神に関しては信じることであり、決して変わらないことです」

《ジャンセニスム》　老人は言いました、「ミューズよ、あなたはここであなたのジャンセニスム（1）を認めなければならない様に私には思える。歴史が何でも解決してくれるものとして人は感嘆するかも知れない。競争や論争が、最後に内部の弁証法と同等になることはあり得る。いずれにしても我々は儀式を崇めて力を求めるのがイエズス会士と判断していいるが、ジャンセニスムはそれと敵対することで身が清められているのである」

ルブランは尋ねました、「〈改革〉の精神ではないのですか」

老人は答えました、「いいえ、全くそうではない。というのも〈改革〉は秩序を変えたものであり、秩序とは多分それに足るものではなかったからだ。秩序を変えることとは、既に秩序を崇めているのであり、そして力を求めているのだ。その上、宗教の戦いはその両方の方針を判断したのである。ジャンセニスムになることとは秩序を断念することであり如何なる敬意も無い。それは戦いが行われる如くに色々な事物の神を拒絶することであり、神の名にかけての正義に対する深い疑惑でもあるが、それは崇拝を変えるものではなく、偶像崇拝を清めに行くものである。　《神》　こうした訳でヤンセン派の人は、デカルトが言った様に純粋な愛とか純粋な高潔さによって、人目のつかない神の中に隠れるのである。精神によるだけで、何も与えない神の中であり、絶対的に弱くて禁止された神の中であり、決して役立たないが、それが反対に役立たねばならず、神の支配に至ることもないが、そこには宗教の奥義があるのだ。私は真実を言っているのであり、宗教だけのことを言っているのである。ここで私は全ての人々に対しては、全ての人々に任せるのである。というのも、全ての人々が偶像崇拝者であり、存在に不満であるからだ」

私は言いました、「パスカルは恐らく全ての神学者たちの中で一番読まれています」

《ミサ》　老人は答えました、「パスカルにおいて服従する理由は先ず騒ぎを生むのだが、直ぐに理解される。しかし、ミサを拒絶することでミサに応えるこの方法を良く吟味してくれ。少なくともミサを拒絶するためには、そこへ行かなければならないのだ」

私は遮って言いました、「それなのにあなたはそこへ行きません。私も行きません」

ルブランは言いました、「私も行きません」

私は言いました、「あるいは、恐らく皆は行きます。私は祖父のことを思い出します。祖父は村で信望があった農民でした。毎週日曜日には、大きな帽子を被って私の手を握りながら歩き出しました。ただ、教会での話は全て終了していて、何本かのワインボトルも空になっていました。女性たちが外へ出て来た時間

には、彼は教会の前にいました。殆どの男性たちは全員が、彼と同じ様に宗教を理解していました。それでも彼は礼儀正しくミサにお金を払っていました。彼の番になると祝福のパンを与える主任司祭とも立派に接していましたし、以下同様です。習慣には沢山の思想があります。習慣は驚く程、敬意の念を熟慮します。どんな男性も治安のためには修道会に多くの寄付をしますが、恐らく寄付は多過ぎてもならないと感じています。外部からの必然性を何時も少しも受入れる気になっていない女性は、そのこと自体によっても少しは儀式に尽くす義務があります。女性は或る意味では男性よりも宗教的でしょうが、或る意味でなくても殆ど誰もがそのことに気付いているかも知れません」

《パスカル》　ミューズは言いました、「政治はそれ故に、あなたのミサに違いありません。それにここには私のミサ曲書がありますが、それはパスカルです。多くの事物が明らかにされているので、私が今日のミサを忘れていても私は残念に思いません。悟性は従って、心以上に鋭敏なのでしょうか」

老人は言いました、「一致しているのは畑の平和と町の平和だ。しかし精神は少しも一致を望まない。我々の幾何学が解体されて作り直される様に、平和も解体されて作り直されるに違いない」

《拒絶》　ルブランが付け加えて言いました、「拒みながらも服従することです。抵抗という一点がありますが、それは恐らく修道士たちの全ての論争の始まりです。男性は服従しますが、常に武器も放しません」

私は言いました、「個人主義に対して、そして個人の神聖な権利の名において、服従するのです。至る所でこの専門語が読まれます。人間はこの矛盾を快活に身に付けます」

老人は再び言いました、「服従しながらも、打ち負かすことだ。色々な無敵の力があるし、無敵の意志もある。間違った神々もあるし、真実の神もある。それは拒絶でしかなく、神聖なる懐疑でしかなく、躊躇でしかない。しかもそれは果てしなく、ご存じの様に些細な行為である。例えば釣り人の船が今方向を変えてもう一方の側の形勢を見ると、直ぐに幾つもの波の中に一つの波が生まれていたり、地球と月の引力と同じ様に我々にとっては奇妙なデータが生まれているのだ。全てのものが、我々の思想においても、その様に事物や対象になるのである」

ルブランは言いました、「一つの敵です」

私は言いました、「運動の中の拒絶です。しかし、決して思考することではないのではありませんか。思考されることそのものでも決してないのではありませんか。この水平線と眺望と曲がって再び閉じられた大空を拒絶して、それらを認めさせること以外に私たちは他に何をするのでしょうか。　《天文学者》　そして、もしも私が信じている月との距離を拒絶することでなければ、どの様にしてそれを知るのでしょうか。いずれにしても私が真実と考えているものを正確ではないと既に私よりも良く知っているのは、天文学者においてです。狼狽して私が思考することは、既に私が思考すべきことではありません。私は、私の完成した色々な思想を拒んで判断します。そして、それが思考することでもあります」

老人は答えました、「正確にデカルトを思考することである。そして誰もがその様に思考している。何時も流動的なその思考は、世界を忘却する人々しか怖がらせないし、何時も抵抗している。十分に抵抗しているし、抵抗のし過ぎでもある。革命を怖がる人々は、革命を望む多くの人々と少しも違いはない。両方とも、バターや野菜の値段の様に気に入らないことも命令によって変えられて仕舞うことを信じているのである。ここで欠けているのは思想であり、何時も戻って来るこの海の思想そのものであり、何も望まずに、そして押される様にして押すことには決して疲れることがない。　《狭い通路》　人間に残されているのは何かに反対する狭い通路と弱い変化である。それは自分の番であったり釣り合いのとれた自分の番であったりする物事の様にしか、決して次の瞬間を見做さないのである」

私は言いました、「それは海の労働と大地の労働です。ここには間の季節である秋とか春の間に、恐らく耕されていない儘放って置かれた四角い庭があります。今では野生の植物が戻って来ています。もっと先

の処では雨と風が無人の砂地に作り直しました。全てのものが均衡を取り戻しますし、世界は過去にあった様に再開します。あそこの高台の家には住人がいない様です。労働が再開されないので、既に廃墟になっています。作ったり作り直したりしなければなりません。それなのに疑念がここの場所にあります。疑念は世界を見せるものです。世界は何時も夢想に覆われていて、夢想を信じると何時も変わり易いのが分かります」

《カリグラ》　ルブランが付け加えて言いました、「そして夢想を信じると、権力は狂気となるのが分かります。もしも私たちが許したなら、カリグラ（3）は明日にもおります。馬でも執政官になるでしょう。そして、工事現場の監督や仕事のまとめ役でないとすれば、権力とは何でしょうか。彼は権力を分かっていて表します。色々な事物の性質を整理して解釈します。そして船上の様に全てが順調になる処まで解釈します。しかし疑念は服従にとっての塩の様なものです。自分を崇拝されていると見る指導者の狂気を如何に判断するのでしょうか。文字通り彼は〈神〉です。偶像崇拝は絶えず自分を作り直します。そして、あなたは恐らく余りご存知ないと思いますが、指導者が自分に感心して見とれると、術策は直ぐに狂気を模範にします」

老人は再び言いました、「偶像崇拝とは、直ぐに大変に力強くて感動的な証拠を見出すものである。何故なら盲目の信仰は、恐れることのない殆ど欲求もない何人もの実行者を生むからだ」

ルブランは遮って言いました、「戦争では第一に恐怖を打ち破ることが重要です。それ故に権力者はここで自分自身に感嘆するための力の追加を見出します。そして、この種の命令が直ぐに法外な数々の悪を生むのも、まさに大変に自然なこの活動によっています。幸いなことに、この海と同じ位に動かない道と列車と車と重荷は幾つもあります」

《地獄》　老人は再び言いました、「そして信者たちの地獄そのものがあり、善の法則に従って悪を増長させながら、無限の力という効果が彼らの思想にないのだろうか。何でも構わないで希望することは、何でも構わないで恐れることに通じるのだ。本当の地獄はこの世の中そのものであり、それは我々の矢を大変確実に我々に差し向け、我々の行動によって我々を罰するのである。確かに何も我々に許されていないが、同様に処方箋が無い訳ではない。我々の間違いは既成事実という一定しない広がりの上では決して特権にならないのだ」

《死ぬこと》　ミューズは言いました、「「けれども死ななければなりません」

老人は言いました、「決して死んではならないのだ。あるいは我々は一時間毎に死んでいると言わねばならず、その意味では我々が信用したい人へのあるが儘の秩序は、算定出来ない諸条件の協力によって消えるのである。常に人は現状を辞任しなければならないのだ。そして、明日に我々は出発するのだ。しかし人は何時もそのことを考えていたので、もしも精神が断念したとしても、その機能そのものは全てのものに対して繋ぎ止めている自分自身としては死ぬことは出来ないのだ。　《希望》　その機能には最早困難が無く、私の子供時代よりも今の時代にとっての困難は少しも無いのだ。そして、後に続く全く新しくて全てがこの大きな世界によって洗われる瞬間の時を信じることが、絶えず生きることなのである。如何なる限界の向こうに、そして限界そのものによって、我々は直線を推し進める様に我々の人生を推し進めるのである。そして最後の瞬間には最大の数と同じ様に、考えることも不条理になるのだ」

老人は一瞬沈黙しました。それから再び言いました、「その様なことは悟性の神学になるだろう。私が形あるものにするのを々夢想したものであるが、それらの結論には誰でも容易に従うことだろう。町の労働を取り戻すために我々には今の処、十分に貯蔵された食糧が無いのだろうか。所謂幸せな農民よ！　そして、次に続く瞬間が常に新しいために、もっと幸せな船乗りよ！」

太陽は既に砂を暖めていました。暖かな大気が顔に再び来ました。遠くには幾つかの帆が見えます。もっと近くには鼠海豚の輪舞が見えます。鴎たちも高く飛んでいました。　《さようなら》　誠実であっ

たり不誠実であったりする海の大きな鏡の中に寺院の秘密を探しながら、収穫を齎す大地には海よりも上の方に最新の草の芽が出ていました。沈黙して再び閉まった諸事物の道へ再び向かう前に、私たちはこの美しい自然にもう一度、感謝の視線を投じました。（完）

一九二九年八月～九月、　ル・プールデュにて

（1）イオは、ギリシア神話でゼウスに愛されたが、妻のヘラの嫉妬を避けるために雌牛に変えられた。
（2）ジャンセニスムは、オランダの神学者ヤンセニウス又はヤンセン（一五八五～一六三八）を源泉として17・18 世紀にポール・ロアイヤル修道院を中心に展開された厳格な宗教運動で、イエズス会と激しく対立した。
（3）カリグラ（一二～四一）は、ローマ皇帝（在位三七～四一）になったが、精神疾患で暴政を行い暗殺された。

訳者あとがき

本書は、フランスの哲学者アラン（1868–1951）が、1931 年にN．R．F．（新フランス評論社）から刊行した『海辺の対話』Enretiens au bord de la mer の全訳です。テキストとしてはガリマール叢書版（1960）に所収されているものを使用しました。電子書籍としては上・下巻の全二巻としました。原書の草稿は、アランが本文の最後に記していますが、1929 年 8 月〜9 月にフランス西部の大西洋に臨むビスケー湾沿いの村ル・プールデュの家で執筆されました。この家は、パリ西郊のル・ヴェジネにある自家の外にアランが購入したもので、1933 年にリセのアンリ 4 世校を定年退職する前にも毎年来ていたようです。

「13 と 17 の数字の間に素数は見出せないだろうし、空間を制限すること、及び時間を合併したり、もっと速くしたりすることは決してあり得ないことであろう……」と 1931 年 3 月 3 日にランブラン夫人への献辞で書いているように、本書は人間の〈悟性〉についてのアランの対話篇と言っても良い稀有な作品です。主に、絵描きの老人と理工科学校生の若者と〈私〉の 3 人の対話から話が進んで行きますが、途中からはミューズ（美神）も話に加わって来る幻想劇のような作品です。

「怖がらせるものは決して美しくありません。美しいものは勇気ある心です」（第九の対話）とアランは言いますが、美には恐怖が不要であり自由がなければなりません。そのためには美を創造する行為にも、実は勇気が必要であることを述べています。そして、それは正しく認識するためにも必要な心であり、〈悟性〉を理解する上でも重要な要素になって来るものと思われます。従って、怖がらせる者は正しくないのであり、美しくもなく、真の勇気も無い者である、と言っても過言ではないと思います。本書はプラトンに倣って、〈悟性〉を主題としたアランにとっての対話篇であると言っても良いでしょう。

二〇一八年十二月吉日　　訳者記す

アラン

海辺の対話（下）

http://p.booklog.jp/book/125121

翻訳者：高村 昌憲

翻訳者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/125121

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト